



**IMAGE QUOTATION
FRANCIS BACON
SECOND VERSION OF TRIPTYCH 1944**

タンジブル [tangible] なものを、
穴に放れ。

M☆A☆S☆H ブログ撰集 1

**BLOG WRITTEN BY M*A*S*H.
PUBLISHED IN 2013.
FIRST ISSUED BY AMEBA BLOG, IN 2010 - 2012.
QUOTE-IMAGES ARE THUMBNAILING FOR AMAZON WIDGETS.**

はじめて読まれる方へ

みなさん、こんにちは。

M☆A☆S☆Hの電子書籍、第三弾をお贈りします。

今回は自分のブログに書いていた記事をセレクトして、ブログというメディア内の情報としてでなく、M☆A☆S☆H個人のコンテンツ=電子書籍として世に残したいと思います。

……たまたまに、ブログを初めて書いた時を思い返したりします。

あの頃は、楽しかったですね ^^

おそらく、皆さんも、僕と同じ気持ちだったのではないのでしょうか？

自由気ままに、肩の力を抜いて、頭の中に思い浮かんだことを何でも書くことができた。

気がつけば、毎日がネタ探しの日々になっていた……っていう感じでしたよね？ ^^

今は SNS が百花繚乱となり、ブログで長い文章を書かなくても、140文字以内の短い言葉で事足りる時代になりました。そんな時代だからこそ、こんなことを思うのです。

ブログを書き始めた頃は、なんであんなに、文章を絞り出していたのだろう？、ということ……。

今回は、M☆A☆S☆Hさんというお名前の方が、頭の中から“きゅう”と絞った文章をお届けします。

M☆A☆S☆Hさんは、村上春樹さんの小説から、マニアックな日本の特撮ドラマまでを、M☆A☆S☆Hさんなりに思ったことを書いています。

ちょっぴり評論家気取りかもしれませんが ^^ ;

それが目新しい視点なのか、ありきたりなものなのか、独りよがりなのかは、読んで頂いた皆さんの思う通りに、いじって頂けたらと思います ^^

2013年8月15日 M☆A☆S☆H

追記

このブログ撰集はアメーバブログ掲載時と同じ状態で電子書籍化しています。

アメブロでは記事内に挿入する低解像度画像を「イメージ画像」と表記し、「引用元」として、Amazon サイトの引用元書籍の販売ページへリンクしました。

電子書籍化に於いても同処理を行い、画像を Amazon ウィジェットとして扱いたいと思います。

タンジブル[tangible]なものを、穴に放れ。M☆A☆S☆H ブログ撰集1 目次

ブログ記事1 フレイザーの金枝篇を希薄にして、1Q84 は先に進む。

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2010/5/9)

ブログ記事2 「冷静と情熱のあいだ」と「1Q84」の恋愛関係

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2010/5/23)

ブログ記事3 エウレカセブンと【金枝篇】から広がるもの

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2010/10/3)

ブログ記事4 ライ麦畑を読み比べて～野崎孝と村上春樹

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2010/9/20)

ブログ記事5 京都買います

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/11/3)

ブログ記事6 小説【1989年】(土居豊 著)を読んで

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2012/12/1)

ブログ記事7 小説【太鼓の少女】(佐藤貝 著)を読んで

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2012/12/1)

ブログ記事8 【KAGEROU】ゴシップの影に隠れた純粹さ

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/1/16)

ブログ記事9 吉本隆明×吉本ばなな

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2012/3/22)

ブログ記事10 桜

(初出 アメーバブログ「かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの」 2011/4/1)

フレイザーの金枝篇を希薄にして、1Q84は先に進む。

2010-05-09 テーマ：書評



(イメージ画像 [ジョゼフ・キャンベル／神話のイメージ](#) から引用)

「私が人間であると云うのは偏見です。私はインドに居た頃は仏陀でしたし、ギリシアではディオニュソスでした。アレクサンドロス大王とカサエルは私の化身ですし、ヴォルテールとナポレオンだったこともあります。リヒャルト・ヴァーグナーだったことがあるような気がしないではありません。十字架に架けられたこともあります」

(フリードリヒ・W・ニーチェ／コジマ・ヴァーグナー宛ての手紙 から引用)

マサユキ「1889年1月3日、ニーチェはトリノ市のカルロ・アルベルト広場で昏倒したと伝えられています。何故、突然に昏倒したのでしょうか？ 俗っぽい言い方ですが、“神は死んだ” “隣人愛よりも遠人愛を求める” と言い過ぎた故の末路であり、神の祟り、なのかもしれません。より高い地位を目指して理論武装をしたとしても、人間には限界があるのかもしれません。

僕は“PLANET OF TEDDYBEAR くまの惑星”という小説を書きました。2002年に初稿を、2009年にリライトを試みました。アメリカインディアンが崇めるグレートスピリットや、キリスト教とイスラム教の同一であるが呼称の違う唯一神のことを詳しく書こうと務めました。それはタブーに触れていたの

かもしれません。リライトを始めてすぐに体調がすぐれなくなり、仕事を休む機会が増えました。それからは用心しながら執筆していったのですが、リライト終了後の翌日、お酒を飲んでいないのに肝臓の辺りが痛み出し、熱を併発したので、僕はまた仕事を休みました。恐怖を感じました。ニーチェの昏倒に近い、と思ったのです。…いかがわしい、と皆さんは思われるかもしれませんがね。それでも、発病する原因が何かあった、と思うのです」



(イメージ画像 [ジョゼフ・キャンベル／神話のイメージ](#) から引用)

「結構トンデモな話なんですよね。異星人の星を探す方法が西洋版こっくりさんだし、オーバーロードが図書館で熱心に読んでるのもオカルト本(笑) (中略) 昔、東京12チャンネルでお昼頃よくやってた、妙なSF映画の雰囲気にもちょっと近いんです(笑)」

(大槻ケンヂ／ダヴィンチ2008年10月号 から引用)

マサユキ「上記はアーサー・C・クラークの“幼年期の終り”に関する、筋肉少女帯の大槻ケンヂのコメントです。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、幼年期の終りはSFの古典であり、シリアスな要素、哲学的な要素も多く含まれています。それをオーケンはわざと“斜に構えて”、ジョークを交えてコメントしています。彼自身の“キャラ”を演じているのかもしれませんが…何かを“避けている”と直感しました。ひょっとしたら…神の祟りを受けないように振る舞っている、と考えられます」



(イメージ画像 [ジョゼフ・キャンベル／神話のイメージ](#) から引用)

マサユキ「さて、本題に入ります。村上春樹の“1Q84 BOOK2”では文化人類学者のJ. G. フレイザーの著書“金枝篇”が紹介されています。奇しくも同時期に発売された大江健三郎の“水死”にも“The Golden Bough (金枝篇)”が引用されているのが、偶然ながらも興味深いです。下記に両者を並べますので、比較してみてください」

「興味深い本だ。それは様々な事実を我々に教えてくれる。歴史のある時期、ずっと古代の頃だが、世界のいくつもの地域において、王は任期が終了すれば殺されるものと決まっていた。任期は十年から十二年くらいのものだ。任期が終了すると人々がやってきて、彼を惨殺した。それが共同体にとって必要とされたし、王も進んでそれを受け入れた。(中略)その時代にあって王とは、人々の代表としてく声を聴くもの>であったからだ。そのような者たちは進んで彼らと我々を結ぶ回路となった。そして一定の期間を経た後に、そのく声を聴くもの>を惨殺することが、共同体にとっては欠くことのできない作業だった」

(村上春樹／1Q84 BOOK2 241頁から引用)

「翻訳を読みます。《……どんなに注意を払い、配慮しようとも、人間神が老齢となり衰弱して遂には死ぬのを防ぐことはできない。彼の崇拝者達はこの悲しむべき必然事に関心を払わざるを得ず、これに対して最善の努力を尽くさなければならない。この危難は恐るべきものである。……この危難を避けるにはただ一つの方法しかない。彼の力は衰え始める兆候を示したならば、直ちにその人間神を

殺し、その靈魂が恐るべき衰弱によってはなはだしく損なわれないうちに強健な後継者に移さなければならぬ。(後略)》(中略)——いまね、『水死小説』をぼくが書くことで母とアサがなにを恐れていたか、その正体がわかりましたよ。高知の先生に解説してもらった『金枝篇』をもっと短絡にして、国家の危機を回避するために人間神を殺せと伝えた、若い将校たちをいったんはその方向に導いていた、とぼくが書くことを恐れていたんだ、と思います」

(大江健三郎／水死 309頁から引用)

マサユキ「1Q84に於いては“王殺し”“声を聴くもの”というキーワードに特化された“特殊なシステム”が浮き彫りにされます。疑いもなくそれは大昔のものであり、ある意味、時代遅れなシステムなのですが、1Q84ではどうやらそれが現代に並置されています。

また水死に於いては、王殺しというキーワードは“人間神を殺す”に摩り替わっています。更に文脈から察すると、太平洋戦争末期に日本国内で“人間神と呼ばれる者”を殺害するクーデターが企てられようとしていた、と捉えられます。物語を読み進めていくと、クーデターは未遂に終わり、代わりに加担していた主人公の父親が洪水に出くわし、溺死するのが判明します。この段階で王殺しの意味は“希薄”になります。王を殺そうとした者が逆に死んでしまう、即ち特殊な力を備えていない平凡な者の死には、特別な意味は見出せないのです。王殺しは現代に通用しない。諦念を抱いた傍観者がこの物語に佇んでいます。

1Q84に戻ると、“声を聴く”特殊なシステムを持つ宗教団体である“さきがけ”が物語上で暗躍したとしても、そのシステムを暴露する小説“空気さなぎ”がベストセラーになり市場に溢れることで、特殊性は無化されます。“空気さなぎ”がフィクションとして、エンターテインメントとして読者＝消費者に認知される程、システムの信憑性は薄れていき、希薄になっていくのです。それは大槻ケンヂがわざと斜に構える戦法と似ているかもしれません。王殺しに関しても、古い王を殺して新しい王に入れ替わるルールに従うよりも、王自身が自らの使命を放棄して“青豆”に殺されることを望む、という物語展開になっていることを、読者は気が付きます。“深田保”と“深田絵里子”親子は、さき

がけのシステムの推進者ではなく、希薄を浸透させる者、だったのです。浸透度は広がっていき、BOOK3の“反リトルピープル=神は我々の内にいる”という主題に結び付いていきます」



(イメージ画像 [ジョゼフ・キャンベル／神話のイメージ](#) から引用)

「でもね、天吾くんは暗い入り口をこれ以上のぞき込まない方がいい。そういうのは猫たちにまかせておけばいい。そんなことをしたってあなたはどこにも行けない。それよりも先のことを考えた方がいい」

(村上春樹／1Q84 BOOK3 487頁から引用)

「『悪いけれど今はまだ教えることはできない。あなただけではなくほかの誰にも。もし私がそれを口にしたら、きっとそのとたんに世界中に露見してしまうだろうだから』 月たちが耳を澄ましている。リトルピープルが耳を澄ましている。部屋が耳を澄ましている。それは彼女の心から一歩たりとも外に出してはいけない。厚い壁でしっかりと心を囲まなくてはならない」

(村上春樹／1Q84 BOOK3 526頁から引用)

「何があっても、どんなことをしても、私の力でそれを本物にしなくてはならない。いや、私と天吾くんと二人の力で、それを本物にしなくてはならない。私たちは集められるだけの力を集めて、ひとつに合わさなくてはならない。私たち二人のためにも、そしてこの小さなもののためにも」

(村上春樹／1Q84 BOOK3 588頁から引用)

マサユキ「春樹さんはBOOK3で“斜に構えた”のだと思います。それは大槻ケンヂのようなジョークではなく、人間の持つ力を、真摯に、実直に振るうことを謳っています。淡々としながらも実直な筆致であるBOOK3の文体が、読者の背中を押してくれます。神の祟りは起きません。謎はありません。それを謎だと思い、こだわった瞬間に、神の祟りは舞い降りるのかもしれませんが。沼野充義さんが言うところの“華麗なる退却戦”の意味が、ここに繋がるかもしれません」

「世界中の神様をひとつに集めたところで、核兵器を廃絶することも、テロを根絶することも、アフリカの間伐を終わらせることも、ジョン・レノンを生き返らせることもできず、それどころか神様同士が仲間割れをして、激しい喧嘩を始めることになるのではないかと？ そんな事態がもたらすであろう無力感を思えば、人々をミステリアスな疑問符のプールに浮かばせるくらい、まだ罪の軽いほうではないか？」

(村上春樹／1Q84 BOOK2 124頁から引用)

マサユキ「僕は去年の書評で上記文章を引用して、そして“冗談ではありません”と付け加えました。…先に進むのに時間がかかりましたね、春樹さん^^； 1Q84 BOOK1～3は合計300万部に及び、大量に配布されればされる程、“現代のリトルピープルに象徴されたシステム”は希薄になっていきます。それは、いかがわしいことではありません」

くまちゃん『あとね、20年もおたがいを想っている“天吾”と“青豆”は、“マサユキ”と“ママ”にそっくり、なんだ(・ω・) お腹のなかの小さなものは、“くまちゃん”、なの(^ω^) くわしくは次回、おはなしするねー。次は5月末あたりに、あっぷ、できればいいなあ。みんな、待っててねー(・ω・) /』

「冷静と情熱のあいだ」と「1Q84」の恋愛関係

2010-05-23 テーマ：書評



(イメージ画像→[引用元](#))

「あのね、約束をしてくれる？　どんな？　私の三十歳の誕生日に、フィレンツェのドゥオモのね、クーポラの上で待ち合わせをするの、どう？　（中略）　でも別に、待ち合わせなんかなくてもいいじゃないか。三十歳の君の誕生日にいっしょに行こうよ。　そうね、二人が別れていなければ。　へんなことを言う。それじゃまるでぼくたち別れちゃうみたいじゃないか。君は予言者かい？　わかんないわ。未来のことは。だからね、今日を大切に思うのなら、約束をして欲しいの。今日のこの気持ちをいつまでも自分たちのものだけにしたいから約束をするの。私の三十歳の誕生日に、クーポラの上で待っていて」

(辻仁成／冷静と情熱のあいだBlu 95頁から引用)

今から10年以上も前に、“ザッピング”という当時は画期的であった手法を用いた、複数の視点で同時進行する小説が出版されました。題名は“冷静と情熱のあいだ”とあります。複数視点の片方を男性の視点、もう片方を女性の視点にして、男女間の恋の駆け引き、互いの心の擦れ違い、相手に届かない独白などを微妙なさじ加減で表現していました。男性視点の小説を“辻仁成”さんが執筆して、“冷静と情熱のあいだBlu”というタイトルで、青色の装丁で出版しました。女性視点の執筆担当が“江國香織”さんです。“冷静と情熱のあいだRosso”というタイトルで、赤色の装丁で出版しました。今の時代でいう“セレブ”な雰囲気を持ち、ザッピング手法が客寄せパンダの役割りを担い、そ

れでいて、ロックミュージシャンから作家に転向した辻さんと、新進気鋭の女流作家の江國さんのカップリング。売れる要素は十二分に揃っていました。

…冷静と情熱のあいだから10年経った今、巨匠“村上春樹”さんが新作“1Q84 BOOK1~3”を発表しました。“時代の変化と共に小説の作法も変わる”と劇中で述べている春樹氏ですが、実は10年前のセレブな恋愛小説と今の時代の総合小説のあいだには、共通点が存在するのです。冷静と情熱のあいだでは、“阿形順正”と“あおい”という二人の男女が学生時代に出会い愛しあうも、別れてしまい、それ以降の8年間は互いに違うパートナーを得て違う場所で日々の営みを送るのですが、実はその8年もの間、“お互いに相手を想っていた”という展開に発展します。1Q84に於いても“天吾”と“青豆”という男女が…なんと小学生の頃から20年間！もお互いを想っている設定になっています。…それでは、ここから考察してみましよう。果たして、長期間もの間、離ればなれになっている男女は、お互いを想い続けることが可能なのか？ そこに潜むのは、永遠のロマンか？ それとも、ベタなエンタメのお約束と言い切れるのか？”



(イメージ画像→[引用元](#))

「朝になったらペディキュアを塗ろう、と思った。私は髪をかきあげ、立ち上がって食器棚をあけた。直径が十五センチほどもある、おおきなガラスの壺をとりだす。パスタ用の広口壺で、白いふたがついている。ワインのコルクを入れてあり、コルクは壺の三分の一ほどをみたして、ふるとことこといい音ができる。私は壺のふたをあけ、コルクを一つずつテーブルにならべた。(中略) コルクには、一つ一つにマーヴの丸みをおびた文字で言葉が添えられている。二人で特別な食事をするたびに、ポケットからボールペンをだして書くのだ。(中略) 私はそれを一つずつ読んで、ときど

き鼻先へもって行って匂いをかいでみる。コルクはもうワインの香りとどめてはいず、ただ乾いた、やさしい匂いがするだけだ。（中略） マーヴと共にした幸福な出来事、そのひとつひとつ、そのつどのワイン。読みながら、私はゆっくり東京をおしやる。胸の奥の闇のなかに。（中略） 目をとじて小さく息を吐く。コルクを壇に戻し、きっちりとふたをしめて棚にしまった。阿形順正は過去だ」

（江國香織／冷静と情熱のあいだRosso 107頁から引用）

冷静と情熱のあいだの引用を進めながら、男と女は永遠に相手を想い続けることができるのか、という考察を進めていきます。最初に物語の大枠を説明します。阿形順正はイタリアのフィレンツェで修復師（大昔の油彩画やテンペラ画などの損傷を修復する画家）の職に携わり、芽実という日伊ハーフの恋人と共に暮らすが、昔の恋人である、あおいを忘れないでいる。そして8年前に交わした、フィレンツェのドゥオモで出会う約束を未だに覚えている。良く言えばロマンチックな青年だが、悪く言えば未練がましい男です。一方、あおいは同じイタリアのミラノでアメリカ人男性のマーヴと同棲していた。上記引用から伺えるように、彼女はマーヴとの生活に満足しています。反面、引用を深く読み込めば見えるように、順正のことを潜在的には忘れられないでいる為に、無理してマーヴへの想いに集中してるように見受けられます。良く言えば女性らしい繊細さを持つのですが、悪く言えば病的な逃避癖も見受けられるのです。

それでも、物語は容赦なく進行していきます。ふとしたことで、順正はあおいの現住所を知り、そして、手紙を送ってしまいます。その手紙は、あおいとマーヴの間に深く“ひび”を刻み込みます。マーヴは彼女のトラウマを知ろうとして、そして、話し合っって問題を解決しようとはしますが…あおいはそれを拒みます。



（イメージ画像→[引用元](#)）

「マーヴの顔が苦々しく歪むのを、私はただじっとみていた。おなじだ、と思った。昔、順正にもおなじことを言われた。その瞬間、私は完璧に理解した。私はこのひとをうしなうのだ。いままさにうしなおうとしているのだ。（中略）“あなたは詮索しないと思ってた。あなたはそんなことを言わないと思ってたわ” マーヴがほんとうにおこったのはこの瞬間だったと思う。“あなたはって、一体誰とくらべてるんだ” マーヴはWhoを連発した。私が石のようにおし黙っていると、マーヴはやがて壁を手で一度強く打ち、“Fuck!”と吐きすてるように言ってでていった。寝室のドアが乱暴に閉まった」

(江國香織／冷静と情熱のあいだRosso 204頁から引用)

上記引用で目に付くのは、あおいの“大人しさと紙一重の弱さ”です。ジェントルに振る舞っていたマーヴですが結果的には嫉妬の炎に負けて、男性らしい粗暴さをあらわにしてその場から逃げ去ります。その行為が、あおいをより怯えさせて、弱者にさせてしまうのです。ある人なら“時間が解決する問題だろう”と答えるかもしれませんが、一旦、引き籠もってしまった彼女の心は、時間が経てば経つ程、不安を一層、深めていくのです。…時のいたずらは、マーヴの転勤＝単身赴任を導き、最終的にあおいは彼と別居し、ひとりぼっちになってしまいます。…せめてもの慰めなのか…彼女は記憶の奥底に閉まっていた、30歳の誕生日に順正と会う約束を決行する為に、フィレンツェのドゥオモに向かいます。…身勝手なのは承知しているし、順正がこんな約束を覚えているかもわからない。ただ、そうでもしないと彼女自身は…バラバラになってしまう…。そうしたら…物語は意外な展開を迎えます。



(イメージ画像→[引用元](#))

「のぼってきた階段の丁度裏側、街の反対側が見渡せる場所に来たとき、私の目は、ある一点にすいよせられた。その人は、片膝を立ててすわっていた。すこしだけ角度のついた、でもほぼ真後ろとっていい位置から、私にはそれが順正だとわかった。びくりとして、とっさに、まさか、と思ったが、そのときにはもう確信していた。あれは順正の背中だ。間違えるはずがない。順正の背中だ。動けなかった。（中略）信じていいのかどうか、でも決心するよりも前に、私は歩きだしていた。

“順正” 会いたくて会いたくてたまらなかった、と、告白しているような苦しい声で、そのひとの名前を口にした。ふりむいた順正の、記憶より削げた頬。息がとまるかと思った。フィレンツェの街を見下ろすドゥオモのてっぺんで。やわらかな、夕方の光の中で」

（江國香織／冷静と情熱のあいだRosso 249頁から引用）

ザッピング視点で進む二つの小説を読者は追っています。順正の物語を読み進めていけば、どんなことがあっても、未練がましい彼は8年後のフィレンツェに必ずやってくる、と読者は既に信じきっています。しかし、順正の気持ちを知らないあおいの姿を追う読者は、ここで二人が邂逅するに至って…不思議な違和感を覚えるかもしれません。あおいは自分をバラバラにさせない“おまじない”のつもりでフィレンツェを訪れたのかもしれない。そうしたら、現実として、順正が目前にいる。抽象的な甘いおまじないは、苦々しい現実には駆逐されます。彼女が一番最初に気付いた“順正の削げた頬”とは、夢見がちだった彼が夢を追うことと引き換えにした代償であり、痛みの象徴。彼女は真っ先に、それに気付いたのです。



（イメージ画像→[引用元](#)）

「あおいの肉体が官能に撓る度に、ぼくは力を込めた。ぼくとて、芽実と愛し合うことで学んだ男女の駆け引きの知識はあった、力を込めたり抜いたりしながら、そんなことを八年前のあおいとぼくは

持っていなかったことを懐かしんだ。 あおいは、アメリカ人の恋人に愛され、これほど美しくなったのだった。 あおいの肉体の変化や体臭の変化にぼくは気がついてしまった。そこにはぼくというものが介在できない域が存在していた。 “順正” あおいの声に興奮しながらも、どうしていいのかわからず途方にくれ続けた。八年ぶりの交接が済んだ後、何千メートルも泳いだ気になったのは何故だろう。いったい何に遠慮して、誰に気をつけていたのだろうか。 あおいはあおいではなかった」

(辻仁成／冷静と情熱のあいだBlu 241頁から引用)

8年振りに出会った恋人通しは、お約束のように愛を交わします。しかし、男性の“さが”なのか、あおいの性的な変化を受け留めながらも、嫉妬に近い気持ちを絡めつつ、複雑な想いを処理出来ずに順正は自信喪失してしまうのです。彼も彼女と同様に、ロマンチックなおまじないとして、フィレンツェのドゥオモで出会うことを夢見て、ただ、出会うだけの“イベント”を望んでいたのかもしれませんが。その後に襲う現実的な痛みは、全く予期していなかった。互いの肉体をぶつけあうことで、ようやくそのことを知る。それは、愚直な男性の滑稽な悲劇、と言っても過言ではありません。



(イメージ画像→[引用元](#))

「話しおわると、順正はコーヒーを啜った。 ——ふらふらしたやつだよね。 ドゥオモで会ったとき、頬の削げた印象だったことを思いだした。精悍な、でも疲れた顔していたことも。 ——順正。私は身体ごと順正に向きなおり、片手で、順正の頬に触れた。 ——うん？ でもわかっていた。私

には何もできないのだと。私には手出しできない場所に、このひとはもう人生を築き始めている。

(中略) 私はうそぶくと立ち上がった。——おいしいお昼を食べよう。午後の列車で帰るから。順正は表情を変えなかった。私の顔をじっとみている。ひきとめてくれない順正の正しさと誠実さを、考えてみれば私は愛したのだった。順正は、ふいに表情をほどいて微笑むと、——わかった。と言った。——大丈夫だよ、とめたりしないから。私の顔が歪んだことに、順正が気づかなければいいと思った」

(江國香織／冷静と情熱のあいだRosso 266頁から引用)

実際の冷静と情熱のあいだは文芸誌の連載として、江國さんが最初の一章を掲載したら、その内容を讀んだあとに辻さんが構想を練って続きの章を書き、更に江國さんが辻さんの章を讀んで…というリレー形式で執筆されていた、と伝えられています。ある意味、男女の駆け引きみたいな展開が作家通しで繰り広げられていたのです。江國さんが描くあおいには弱い面があり、強固な現実に向き合えませんが。最終章に至り、あおいは、マーヴと幸せに暮らしている、と嘘をつき、順正との邂逅を思い出に終わらせようとします。…カッコつけたかった、なのでしょう。それでも彼女の本音は、“止めたりしないから”という言葉に顔を歪ませてしまうところに表れています。女性的な側面を哀愁に変換させることで、物語は悲劇的な幕を閉じる…かと思われたのですが…。



(イメージ画像→[引用元](#))

「冷静が最後には勝った。構内に迷い込んでいた鳩がやっと出口を見つけ外へと抜け出していった。小さくため息が零れる。あっという間だった。思い出を反芻する間もないほど、あっけない幕切れである。こんな結末のために自分は八年も待っていたのかと思うと、脱力し、そこから動くことができなかった。これじゃあ、死んだも同然。(中略) ドゥオモのクーポラが見える。通りの突き当た

りに威風堂々と聳えていた。はじめてこのクーポラを見上げた時の感動を思い出した。あの時はまだ情熱があった。いつかきっとここであおいと再会する、と信じていることができるだけの。（中略）
どうして……と頭の中を何かが掠める。そうだ、どうしてだろう、と思い直す。どうして、あおいはここへやって来たのだろうか。ぼくは自分の中で小さな情熱が巻き返しの反撃に出るのを感じる。この瞬間、過去も未来も色あせ、現在だけが本当の色を放つ。広場を爽やかな風が吹き抜け、ぼくは風の流れに目を止める。四方八方からドゥオモに集まってくる人々の石畳に映る長い影が揺れる。過去も未来も現在には叶わない、と思う。世界を動かしているのはまさにこの現在という一瞬であり、それは時の情熱がぶつかり合って起こすスパークそのもの。（後略）

“あおい” もう一度、心の中で彼女の名を呼んでみる。大切なのは現在。サンタ・マリア・ノヴェッラ駅を振り返り、歩きはじめる。ぼくはまだ何も試していない。試さないで、彼女を一人、彼女の現在へと送り返しては駄目だ。この八年を再び凍りつかせては駄目だ。駅にたどり着くころには僕は走りだしている。過去にはさせない、と念じながら。駅構内にぶら下がる超特大の時刻表掲示板を見あげる。一番早い列車は十八時十九分発のユーロスター（国際特急）だ。それに飛び乗れば、ミラノに到着するのは二十一時丁度になる。あおいの乗ったインターシティよりも十五分早く着くことになる、十五分、たった十五分だが、ぼくは未来を手に入れることになる。まだ間に合うのだ」

（辻仁成／冷静と情熱のあいだBlu 252頁から引用）

辻仁成さんが描く小説の魅力は、乱暴な言い回しをすれば“ロックンロール的なダイナミズムと爽快感”を持ち合わせていることです。特に物語が最終章に近づくにつれて、まるでロックのライブが終盤で盛り上がるように、アドレナリンが大量放出されたような興奮が畳み掛けるのです！ 冷静と情熱のあいだでも、辻さんの武器は炸裂しました！ 江國さんが描くあおいの最終章が、物語序盤から見せていた弱さを貫いて余韻を残したのに対して、読者はひょっとしたら悲劇的なエンディングでは満足しないのでは？ と突っ込むが如く、辻さんの描く最終章では順正の弱さを強さへとシフトチェンジさせていきます。夢見がちであるからこそ、根拠の無い＝純粋な自信が湧き上がり、順正を鼓舞させていきます。それもひょっとしたら滑稽かもしれませんが、笑われてもいい、あの時、止められ

なかった後悔を15分早く目的地に着くことで取り戻す！ 早く着いてもあおいに会えないかもしれないし、事故などの支障が起きるかもしれないが…そんなことはどうでもいい！ 可能性に賭ける！ その潔さ、その後に訪れるカタルシスこそが、恋愛小説の定石を超えた、物語＝娯楽＝フィクションに求められる“最善のもの”なのかもしれませんね。

くまちゃん『長いブログさんになったね（・ω・） で。1Q84にもおなじ、恋愛のかけ引き、が、あるのかな（？ω？）』

マサユキ「うん。確かに長文になってしまったので、最後はシンプルに纏めます。特に1Q84 BOOK3に於いては、青豆と天吾との20年越しの想いが添い遂げられるシーンが描かれています。個人的には上記の冷静と情熱のあいだの邂逅に近い感慨が湧き上がるのですが、細かい襞（ひだ）に関しては辻さん江國さんの方が丁寧に描いてる、と思っています。春樹さんは完璧な恋愛小説を描いたのではなく、ミステリーや暴力的なアクション、哲学的な要素までを含めた“総合的な小説”を描いたのであって、その前提に従って、終幕に恋愛要素を強めに加減調整して、更にハッピーエンドにすることによって、読後感を意識的に爽快にさせたのかもしれませんが。“恋愛”は、物語を美味にする最高の調味料であり、無敵に仕立てあげる高性能の武器なのです。それを1Q84は器用に使用しただけかもしれませんが…個人的には、冷静と情熱のあいだの方が、10年前の古臭さはあったとしても、恋愛描写は真摯だと思います。駆け引きの描写も明確です。1Q84の恋愛は冷静と情熱のあいだと似ているかもしれませんが、シャネルやエルメスなどのブランドを贗物にした感覚があるかもしれませんね」

くまちゃん『んじゃあ、これでおいとま、するねー（・ω・） 次回かえるちゃんブログは、6月のさいしょの週末におおくりします。むずかしいマサユキもいるけど、かわいいくまちゃんもいる☆ それがかえるちゃんブログの本質なんだって、マサユキは言ってるよ（・ω・） / よくわかんないけど、そーなのかもしれないね、てへ（^ω^）♪ じゃあねー、ばいばいきーん（‘ω´） /』

コメント

1 ■愚直な男性の滑稽な悲劇

うーん。なんか、わかるなあ。

男は女と違って、決定的な強み（受胎し出産するとか）が、

ないですから、どうしても愚直にならざるをえない。

それが、喜劇なのか悲劇なのか？

男子たるもの、鉄腸を引き締めて生きましょう。

奇想天外なマルチタレントのobiwan3 ヒーラー 2010-06-03 19:26:40

2 ■Re: 愚直な男性の…

>奇想天外なマルチタレントのobiwan3 ヒーラーさん

コメントありがとうございます。

鉄腸を引き締める。良い言葉ですね。

僕の方もobiwan3のブログ、拝読してます。機会みてコメントいたしますね♪

M☆A☆S☆H 2010-06-03 19:46:15

エウレカセブンと【金枝篇】から広がるもの

2010-10-03 テーマ：特撮・ゲーム・アニメ・ヘビメタ・PUNK

マサユキ「皆さん、こんにちは。神無月の10月になったので、毎月恒例、YouTubeヘッダーを更新しますね。今月のYouTubeは“アニメ”です☆ “交響詩篇エウレカセブン”の最終回の挿入歌、“電気グルーヴの虹”をお贈りします」

くまちゃん『にじ、は、まさゆきのおともだちが、好きなんだよね（・ω・）』

マサユキ「うん^^ 今年のブログテーマを“懐かしテクノ”にして色々と探してたんだけど、友達から“虹がいいよ〜”って言われて^^ 実は電気グルーヴはシャングリラで止まってた僕です^^ ; それでYouTubeを調べたら、エウレカセブンのアニメ映像にかかった虹を発見しました。瑞々しいと思った☆」

(それでは、下記から一人解説を！)



(イメージ画像→[引用元](#))

エウレカセブンのお話を色々調べると、何処かで聞いたことのあるキーワードがいっぱい出てきます。“KLF”や“LF0”とか。機動戦士ガンダムで言うところの“モビルスーツ”みたいに、ロボット兵器の名称として“KLF”が使われているのですが、これは実在するテクノ・ハウス系のユニット名を引用してるんですよね^^他にも色々な引用が目に着きますが、中でも際立つのが“金枝篇”ですね。

金枝篇は19世紀の文化人類学者“J.G. フレイザー”が編んだ書物で、主に古代の神話や伝承から“王殺し”の主題を拾い、纏めて上げた物です。奇しくも“村上春樹”さんの著書“1Q84 BOOK2”や、ノー

ベル文学賞作家“大江健三郎”さんの著書“水死”にも金枝篇は取り上げられています。



(イメージ画像→[引用元](#))

…で。エウレカセブンの場合は、映像内に金枝篇の書物が実際に登場し、王殺しに沿った物語を垣間見る時があります。それでも個人的な見解は、主役の少年少女、“レントン”と“エウレカ”との“ボーイ・ミーツ・ガール”的な恋愛要素を物語の主軸に感じます。舞台設定や時代設定に於いても、現実世界と見比べると不確かな部分を感じるので（空中を航行する船や巨大ロボット兵器が出る時点でリアリズムは崩壊しています）、例え時代設定を“近未来”と仮定しても、古代神話から考察された“王殺し”が近未来の物語に融和するかと問えば…説得力が弱いと思います。



(イメージ画像→[引用元](#))

…寧ろ、皆さんもご存知かと思いますが、“新世紀エヴァンゲリオン”というアニメに登場する“死海文書（しかいもんじょ）”と同じ存在として、エウレカセブンの金枝篇も扱われているかもしれません。エヴァンゲリオンも“碓シンジ”“綾波レイ”“アスカ・ラングレー”等の、思春期の男子と女子の恋愛や葛藤、自分探しが主軸の物語ですよ。

…ここで言う“死海文書”とは、新約聖書の史実以前に実在した“原始キリスト教的集団が記した写

本”を指します。20世紀に実際に、中東アラブに位置する“死海”と称される湖の、その近辺にある洞窟から写本が発見されました。つまり、発見されたばかりでもあるので内容の解釈も“謎”な部分が多い為、その“謎＝ブラックボックス的な部分”を、物語に神秘的な要素を加える為に、エヴァンゲリオンは死海文書を“利用した”と個人的に推測しています。実質は、死海文書は物語の中心的な存在ではなく、ある種のRPG的なファンタジー要素を加味する“隠し味の調味料”に過ぎなかったのです。…エウレカセブンの金枝篇も同様と思っています。



(イメージ画像 [新潮社／考える人 2010年夏号](#) から引用)

さて。上記“1Q84”の執筆秘話も含まれた“村上春樹”さんのロングインタビューが、新潮社発行の季刊誌“考える人 2010年夏号”に掲載されました。そこで春樹さんは、1Q84内に引用したフレイザーの金枝篇について、こう語ります。

「フレイザーは昔読んだきり、じつはあまり覚えていないんだけど、『生きるよすがとしての神話』のジョーゼフ・キャンベルなんかはよく読みました」

(考える人 2010年夏号 45頁より引用)

…ええっ？ と、思わず唖ってしまう発言ですね^^； …春樹さんも、あまり読み込んでいないフレイザーを“RPG的な軽めファンタジー要素”としてサンプリングしたのかな？と、思わず疑ってしまうのですが…ところが、春樹さんはこう続けるのです。

「僕の場合、そういう本に書かれていることは、直接手にすることのできる（中略）タンジブル（tangibile）なマテリアルなんです。文化人類学ではそれを、シンボルとかメタファーとかアナロジーとして捉えるわけです。（中略）小説家にとっては、シンボルでもメタファーでもアナロジーでもなくて、“実際に起こること”なんです。物語に“それを放り込めば”、現実として“本当に起こる。”それがどのような結果を導くか、その“導かれた結果も現実のもの”なんです。それを見届けるのが小説家の役目なわけ。だから『金枝篇』を読んでいるだけなら、それはただそこに留まっているわけで、それを“穴の中に投げ込んで動かさないと駄目”です」

（考える人 2010年夏号 45頁 より引用）

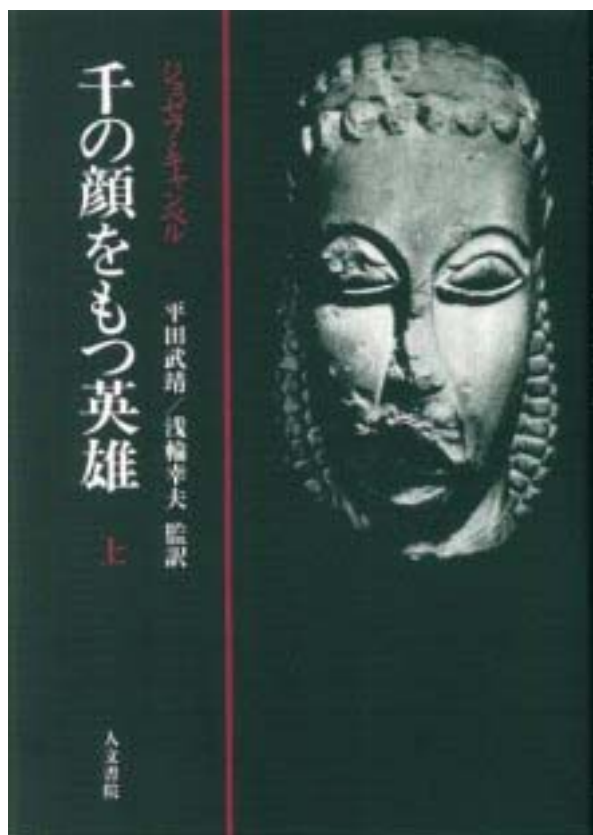
平易な言葉ですが、一見すると…何を言ってるのか、意味が掴めないかもしれません。この発言から個人的に思うのは、“メタファーをメタファーとして終わらせずに、物語に活用する”という姿勢です。メタファー、即ち“比喩”を、“例え話”として捉えた場合、“世界中の森の木が全て倒れる位に驚く”と例えたとしても、実際に本当に木が倒れる訳じゃあない^^ それでも、その“例え話”を文章表現に駆使するのが“小説家”であると、春樹さんは真っ先に伝えていると捉えました。

上記引用で使われてる“現実”という言葉の意味は、小説内で描かれている“物語”の、その架空世界を成り立たせる為に構築された“モチーフ（素材）やルール（世界観）”であると捉えられます。小説内に描かれた“現実”を“執筆”することで、我々が住んでいる“本当の現実社会”に向けて、“小説がゼロから産み出される”のを“見届ける”のもまた、小説家の使命である、と春樹さんは述べていると思います。

金枝篇には世界各地の古代神話や民間伝承の事例が数多く記されていて、それらはメタファーとして、物語を表現する為の技法として十分に活用出来ます。つまり、ネタの宝庫なのです。だからこそ金枝篇そのものを、物語の中にその俣、登場させただけでは勿体無いから、メタファーを活用して、別の

意味に置き換えて、オリジナルの物語として再生成することを春樹さんは訴えているのでしょう。

…改めて、物語の中にその俤、金枝篇が登場するエウレカセブンと、村上春樹の小説作法とを比較すると、各々が別方向を向いていることが伺えます。



(イメージ画像→[引用元](#))

…さて、話を少し進めます。先程、春樹さんが“フレイザーよりキャンベル”と仰っていたので、ここで少し“ジョセフ・キャンベル”について説明したいと思います。彼もまた、フレイザーと同様の文化人類学者であり、フレイザー亡き後の20世紀に活弁を奮い、より発展的な理論を打ち立てました。



(イメージ画像→[引用元](#))

日本の名だたる編集者の“松岡正剛”さんは、ご自身が運営されるWEBサイト“千夜千冊”に於いて、

キャンベルをある意味“面白く”紹介しています。以下に引用しますね。

「有名になったのは色々理由がある。俗っぽいところから言うと、“ジョージ・ルーカス”が大学でキャンベルの授業をうけて大いに感動し、その英雄伝説の基本構造を『スター・ウォーズ』3部作にそっくり適用して大成功を収めた。(中略)世界の英雄伝説に共通している構造というのは、単純化すると次のような3段階になる。

(1)「セパレーション」(分離・旅立ち)→(2)「イニシエーション」(通過儀礼)→(3)「リターン」(帰還)

英雄はまず、(1)日常世界から危険を冒してまでも、人為の遠く及ばぬ超自然的な領域に出掛けるのである。ついで、(2)その出掛けた領域で超人的な力に遭遇し、あれこれの変転はあるものの、最後は決定的な勝利を収める。そして、(3)英雄はかれに従う者たちに恩恵を授ける力をえて、この不思議な冒険から帰還する」

(松岡正剛 WEBサイト 千夜千冊/ジョセフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄』上下 から引用)



(イメージ画像→[引用元](#))

…です^^ つまり、キャンベルもフレイザーと同様に、世界各地の古代神話や英雄伝説を“メタファー”として数多く広い集めて、そのメタファーが機能する“物語の構造”を纏め上げた訳ですね。それをルーカスが、先程の春樹さんが提唱した姿勢の通りに、メタファーを再生成してオリジナルの物語“スターウォーズ”に仕立て上げた、となる訳です^^

…更に、松岡正剛さんは、こう続けています。

「それにしても、英雄伝説には以上の様な基本の流れと、基本の特質があるということを知ると、“物語の母型” というものが、いかに多くの“物語・小説・オペラ・映画・劇画・マスメディア” による実話再生法などに頻繁に使われていたか、そのことに驚くにちがいない。(中略) キャンベルは、人間の根本に宿る物語には、

『眠り(闇)』と『覚醒(光)』の絶えざる循環という母型

『実界(此岸・現世)』と『異界(彼岸・浄土)』の境界を告知し続ける母型

『父(隠れた力)』と『子(試される力)』の関係の不確定を巡る母型

『個体(ミクロコスモス・部分・失われたもの・欠けたもの)』と『宇宙(マクロコスモス・全体・回復したもの・満ちたもの)』との対立と融和と補完を巡る母型

などが、きわめて多様にばら蒔かれていたことを示したのだ」

(松岡正剛 WEBサイト 千夜千冊/ジョセフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄』上下 から引用)

…話が太仰になってきましたが^^； 見方を変えれば、エンターテイメントに於ける物語の作り方、即ち“ドラマツルギー” は、古代神話の構造に共通する部分がある、となりますね。下世話な発想だと、ネタに詰まれば神話をパクればOK！ …となる訳です^^； 但し、そう簡単に神話をネタ代わりに扱うならば、“現代に住む我々にとっての古代神話の位置付けとは？” “古代の人達は日々の生活に神話を、どの様に取り入れて暮らしていたのか？” という面にまで踏み込まないと…神話に対して失礼になるかと僕は思っています。



(イメージ画像 [J.G. バラード／残虐行為展覧会](#) から引用)

ここでまた、松岡正剛さんに登場して頂きます。松岡氏が主催していた“工作舎”から、イギリスのSF作家“J.G. バラード”の著作“残虐行為展覧会”が出版されたことがありました。その巻末に、松岡氏とバラード氏が贅沢な対談を行っているのです。それを引用しますね。

バラード「近頃は、殆んどの人間が他人の想像力に依存してきた。以前は宗教がそうであったのが、現代では演劇や映画、テレビを見て済ましている。これではいけない。ひとつの想像力に百万人の人間が依存して、他人の想像力の中で生きている。こんな現象はもう終わらなくてはならない。……近い内に、皆が自分の想像力を使う様になるでしょう。マイクロ・コンピューターや家庭内のビデオ装置などがそれを可能にしてくれると思います」

正剛「『想像力の共有』は可能だと思えますか？ 同時的共有、です。誰かが作った想像力世界を遅れて共有する様では、そこに政治的権力などが発生してしまいます」

バラード「僕は可能だと考えています。過去に於いてはそれを『宗教』と呼んだのではないのでしょうか？ ……神話とか伝説とか」

正剛「しかし、我々は伝説を失った世代だ」

バラード「その通りです。そして、新しい神話はまだ始まっていない」

正剛「それだけに『神話の作られ方』が気になるし、僕がSFを含めたあらゆる想像力の所産に眼を開いていようと思ってるのも、その『間神話期』に我々がある、と考えている為です」

(J.G. バラード 残虐行為展覧会 252頁から引用)



(イメージ画像 [新潮社／考える人 2010年夏号](#) から引用)

…更に、前述で挙げた“考える人 2010年夏号”でも、村上春樹氏はこう語っているのです。

「21世紀に入ってから、僕の小説に対する世界反応が大きく変わってきたという実感があります。手応えが目に見えて変化してきた。日本でもやはりある程度変わってきたと思う。だって『1Q84』みたいな小説があつという間に百万部売れるなんて、にわかに信じがたいことですよ。はっきり言えば、わけのわからない話なんだもの。(中略)となると、その背景には、なにかひとつ大きな時代的潮流の変化があるのではないか。モダンがあって、ポストモダンがあって、そのポストモダンがトラックを一周して、“ひとつの局面はもう終わりを告げたんじゃないか”、そういう気がしています。(中略)詳しい説明はできないけれど、そういう“ありありとした実感”を持っています。『神話の再創成』みたいなことがあるいはキーワードになるんじゃないかと、個人的には漠然と考えているのですが」

(考える人 2010年夏号 76頁 より引用)

松岡氏とバラード氏の対談と、春樹氏の発言を読み比べると、共通点が見出されます。一言で言えば、“現代に相応しい【新しい神話】を、何らかの形で創成したい”という“クリエイターの願望”が、そこに表れています。

…実は、松岡バラード対談は1977年に行われた物です。そして上記に挙げたスターウォーズの初上映も1977年。それはSF小説や映画等の“エンターテインメントのフォーマット”を、古代人が崇めた畏敬なる神話の域へと高める事が出来るかもしれないという、松岡正剛さんの“編集者視点による予言”であったのかもしれませんが。

時を経て、“考える人”の春樹さんインタビューは2010年のものです。スターウォーズから30年以上も時間が経過しています。春樹さんのデビュー作“風の歌を聴け”も1979年に出版されて、やはり30年近い年月をかけて小説作法が変化してきたことを“考える人”でのインタビューで述べています。そこには、1970年代では未だ成熟することが出来ず、“モダン”や“ポストモダン”の指針でスタイリッシュに振り回されていた“虚飾に身を包む物語”であったのが、ようやく内面が熟れて膨らみ始めて、“虚飾の殻を剥がし、遂に神話の域に至る機会を得る”という感覚が表れているのかもしれませんがね。



(イメージ画像→[引用元](#))

…という訳で、今回のブログはこれでおいとま、したいと思います。最後にまた、松岡さんが編集されたジョセフ・キャンベル氏の言葉を引用して、お別れいたしますね。

「神話には集約すれば4つの力があって、それは、

- (1)存在の神秘を畏怖に高める力
- (2)宇宙像によって知のしくみをまとめる力
- (3)社会の秩序を支持し、共同体の個人を連動させる力
- (4)人間の精神的豊かさに背景を与える力

というものである」

(松岡正剛 WEBサイト 千夜千冊ノジョセフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄』上下 から引用)

キャンベル氏が上記に示した“神話の定義”が、春樹さんが提唱する“21世紀の新しい神話の再創成”に繋がるかは…自由に考察して頂ければと思います ^^

くまちゃん『ざんご〜く、な、天使のて〜ぜ、しょおね〜んよ、神話にな〜れ (^ω^) ♪』

マサユキ「…くまちゃんがエヴァンゲリヲンのOPソングを歌うのは、メタファーかな? ^^」

(かえるちゃんブログ、次回は10月中にあと一回か、もしくは11月に。“暑さ寒さも彼岸まで”で、確かに秋分の日を過ぎたら涼しくなったのですが、寒い日もあります。皆さん、体調管理に気を付けて、秋をお過ごしくださいね☆)

コメント

1 ■毎回、濃すぎる

内容に圧倒されています。知識の規模がスゴイです。

僕は村上春樹のインタビュー集は立ち読みしただけ。

相変わらず写真嫌い？みたいですね。

あ、高校の同窓生で、以前、彼の村上春樹ブログで

僕のイラストのことも紹介してくれた友人は、

現在、村上春樹関連のイベント講師として

ノーベル賞の発表！に向けて関西で精力的に活躍中です。

M☆A☆S☆H さん、アルファポリスのブログジャンルにいらっしゃったんですね。

もちろん応援クリックです。テディベアも（笑）

池田モノリス iMonolith 2010-10-03 18:55:30

2 ■ヒント刺激ありがとうございます

^^

やはり、

M☆A☆S☆H さんただものではありませんね。^^

有能な作家が自然にそして必然に、神話にいきつくということは、スターウォーズの話とは別に当然のことだと思います。

五木寛之などは、世界の作家が同じテーマで書くことはそれ自体が「神の存在」の証明だとも描いていますからね。

フレイザーは素晴らしい学問業績ですね。グリムもそうですが、ユングのまさに、人知の無意識的なる集合から生まれでた「物語」には何か深い「意味」とエニグマがあるのは当然でしょう。

それは日本であれ、ヨーロッパであれ、世界のひとりひとりの個人を活性化させる力を持っています。

円循環的なカサノバの生涯を含め、私たちの人生もまた、金枝編の物語のなかのひとつを演じているのだけなのかもしれませんね。

春樹氏もまた充電としての神話にとりつかれているのかな？笑い。

これから楽しみです。

Huruhon 2010-10-03 20:55:44

3 ■Re: 毎回、濃すぎて済みません ^^ ;

>池田モノリス iMonolithさん

こんばんは☆

実はモノリスさん、初コメだったりします ^^わあい☆

モノリスさんの様な個性豊かな方から「濃い」と命じられるのは「名誉」ですね ^^

ありがとうございます ^^

今回の記事は、エウレカセブンと金枝篇から発展させていったら、こうなっちゃいました ^^

考える人の春樹さんインタビューの「フレイザーよりキャンベル」「メタファーでなくて現実」発言があったから、想像力が飛躍出来たんですね ^^

僕にとっては「村上春樹＝メタファーの人」だったので、それがメタファーに留まらない発言をしてくれたので、新しい視点が開けました。

モノリスさんの御友人とは、今年の春に「はびきの市民大学」で講演されていた方でいらっしゃいますよね？

僕はツイッターにて、同じくはびきので講演されていた土居豊さんに懇意にさせて頂いています。

土居さんとモノリスさんとのやり取りも拝見してましたので、御友人様の事も陰ながら存じておりました。

…不思議なご縁ですよ ^^

アルファポリスの応援、ありがとうございます。

機会みて、お返しクリックにお伺いいたしますね ^^

M☆A☆S☆H 2010-10-03 23:02:14

4 ■Re: ヒント刺激ありがとうございます

>huruhonさん

こんばんは。コメントありがとうございます。

huruhonさんの様な博識な方から「ただものではない」と仰られると…恐縮です ^^ ;

世界中のあらゆる物語の行き着く先が「神話」に重なるとしても…例えば、僕がこの記事で最初に取り上げたエウレカセブンやエヴァンゲリオン等のアニメーションは…未だ、神話のイデオロムを使いこなすには至らないかもしれません。

それは、まあ…エヴァンゲリオンの庵野監督や、エウレカセブンのシリーズ構成された佐藤大氏が僕と同世代でもあるので、世代的にも彼等が触れたサブカルチャーの嗜好は何となく理解出来ます。

そんな彼等が目指してるのは神話でなくて、サブカルチャーを多層に重ねる事で得られる化学変化みたいなものであり、では何故、そのケミストリーを求めるのか？と問えば…理由は無いと思います ^^ ;

そこに意味を求めるか？否か？で変わってくるのですが…無意識的に踏み込まないでいるのが「今の時代の気分」なのかもしれませんね。

それこそhuruhonさんが以前、語られていた「純文学が貧血を起こしている時代」である訳ですからね^^；
「セカイ系」と俗称される若い作家達の物語ジャンルがあるのですが、それが「現代の神話の再創成」に繋がるかは…まだ簡単に答えが出せない、と、個人的に思っています。

村上春樹さんも…どうなるかは判りません^^

今は…あたたかく見守っていきたいですね^^

M☆A☆S☆H 2010-10-03 23:41:23

5 ■なるほど～

エウレカセブンに出てくる『金枝篇』は実際にあるそういう書物なんですね。

勉強になりました。

個人的にエウレカセブンといえばパチスロですね（笑）

ブログ楽しみにしてまーす。

特殊磁気テープス 2010-10-04 12:55:49

6 ■Re:なるほど～

>特殊磁気テープスさん

こんばんは^^コメントありがとうございます^^

そう、金枝篇は実在する書物なんです。

折しも、1Q84や大江健三郎さんの水死でも引用されたから、急に目立った感がありますね^^

ちなみに、∀ガンダムも金枝篇を元に構成された噂がありますね。

エウレカセブンがスロットに二次利用された時は、最初はちょっとびっくりしたけど^^

…エヴァンゲリオンも利用されてると思うと、ちょっと納得ですね。

ますます、金枝篇が遠くなります^^；

また機会ありましたら、遊びにきてくださいね☆

M☆A☆S☆H 2010-10-04 17:36:17

ライ麦畑を読み比べて～野崎孝と村上春樹

2010-11-21 テーマ：書評

皆さん、こんにちは。今月は比較シリーズと称して、“J.D. サリンジャー”の代表作でもある“ライ麦畑をつかまえて”の二種類の翻訳を、“野崎孝”さんが半世紀程前に翻訳された物と、“村上春樹”さんが最近翻訳された物とを比較したいと思います。両者の翻訳文章で気になった箇所を引用して、個人的に見つめてみますね。それでは最初に、野崎さんや春樹さんとは別件の“松岡正剛”さんのライ麦畑をつかまえて（以降、“ライ麦”と省略）記事を引用して、イントロダクションとします。

【ライ麦をビョーキ扱いした松岡正剛】

サリンジャーがこの作品で用意したキーワードは“phony”である。“インチキ”とか“インチキくさい”といった意味だ。（中略）大人社会の“phony”な欺瞞と、その大人社会を真似るしかなくなっている高校生達の欺瞞に向けられていて、それが徹底してというか、くどすぎるほどに吐露される。では本人の（主人公である）コールフィールドはどんな日々を送っているのかというと、その欺瞞社会をすっかり覗き見たほどにスレているのだが、妹と送った少年の日々がやたらに懐かしいわけなのである。（中略）そのうえ最後の最後になって、実はコールフィールドが精神病院に入っている状態だったのも明かされる。（中略）“これは20世紀のハックルベリー・フィンだ”というアメリカ文学史のお墨付き常識があるのだが、これは当たってはいない。ハックは観察こそすれ、批評はしないし、だいいちビョーキじゃない。

（松岡正剛 千夜千冊／J.D. サリンジャー『ライ麦畑をつかまえて』 から引用）

上記引用はライ麦の主題の通説になっている“思春期に於けるイノセンスの象徴”というものを肯定せず、逆に“ビョーキ”という言葉을強調して、盲目的にライ麦を奨励する状況を批判しています。併せて松岡氏は、そんなライ麦を国内で流行させた張本人として、村上春樹氏も批判しています。

大のサリンジャー派の村上春樹は、コールフィールドはメルヴィルの“白鯨”、フィッツジェラルドの“偉大なるギャツビー”の主人公たちに続くアンチヒーローで、そこには“志は高く、行動は滑稽になる”という共通の特徴があると言っていたものだが、この大袈裟な指摘もまったく当たっていない。むしろ村上が“ノルウェイの森”のレイコに、“あなたって何かこう不思議なしゃべり方するわねえ、…あのライ麦の男の子の真似してるわけじゃないわよね”と主人公に向けて言わせているのが、これがコールフィールドが日本に飛び火していた何よりの証拠だったのである。

(松岡正剛 千夜千冊/J.D. サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』 から引用)

興味深いことに、松岡氏のWEBサイト“千夜千冊”では、村上春樹を扱っていないのです…。個人的な嗜好が上記批判に含まれてるかもしれませんが、更に興味深いことに、その村上春樹氏がなんと！…松岡氏の“ビョーキ説”に賛同してるのです！ 春樹さんが翻訳家の“柴田元幸”さんと対談した“翻訳夜話2 サリンジャー戦記”に於いて、春樹さんは“サリンジャーはPTSDを患っていた可能性があり、小説内に於ける主人公のホールデン・コールフィールドの行動は、著者のセルフ・カウンセリングに繋がる”と語っています。

一九四四年三月にサリンジャーは歩兵部隊の一員として英国に送られた。(中略)四四年の九月から翌年の春にかけて、ドイツ軍相手のきわめて熾烈で血なまぐさい戦闘を経験することになり、それをくぐり抜けたことによって、サリンジャーの戦争観は一変する。(中略)一九四五年五月にドイツが全面降伏したとき、サリンジャーは疲弊しきった兵士の一人だった。(中略)その結果彼はニュールンベルクの陸軍総合病院に收容されて、治療を受けることになる。(中略)彼はその後、通常社会で通常の間人関係を保って生きていくことに、はっきりとした困難を覚えるようになる。落ち込みや怒りが、彼の精神の基盤のひとつになる。今ならPTSD (post traumatic stress disorder 心的外傷後ストレス障害) というカテゴリーに入れられているところだろう。しかし当時は「神経衰弱」というきわめて漠然とした病名しか与えられなかったし、したがって治療法もかなり粗く、不十分なものだったと推察される。彼がこの病院で治療を受けていたときの体験が、ホールデンがサナトリウムで治療を受けている状況の原型になっていることはおそらく間違いないだろう。

(翻訳夜話2 サリンジャー戦記 196頁 より引用)

そういう意味では、『キャッチャー』を読むと、これは彼自身による自己のトラウマの分析と、その治療の道を見つけるための自助的な試みなんだな、というふうに僕は捉えるわけです。

(翻訳夜話2 サリンジャー戦記 37頁 より引用)

ここまでの状況から伺えるのは、松岡氏のライ麦批判はある意味“ビョーキだからダメ”という差別意識が感じられるのと、春樹さんの“病気であるのを認めたと上で、従来のライ麦とは違う見方を試みよう”という姿勢ですね。個人的には、松岡氏に矮小さを感じています。

一方、1964年に発行された野崎孝氏の翻訳こそ、“イノセンス賛美”の主題が奨励される要因と思われがちですが…意外と野崎さんは、主人公ホールデンが繰り出す“無鉄砲な行動そのもの”に興味を示す後書きを記しています。

しかし、「幸運を祈るよ」と歴史のスペンサー先生に言われて、反射的に嫌悪を感じ、自分ならばそんなことは絶対に言わないだろうと思うホールデンの感覚は、たとえば、葉書などに「ご多幸を祈る」と書くことに抵抗を感じたことのある日本人ならば、容易に理解することができるはずだ。(中略) 相手にプラスを与える性質の言葉を、自分の真意以上の効果を孕ませて口にするのはいやらしい。ホールデンの反撥の基本的なものはここにある。だから、この感覚、この反撥が理解できれば、この小説は一挙にわかるはずだ。(中略) しかし、大人の正体はある程度見抜けても、大人たちが巧妙に、あるいは狡猾に案出した現実処理の方法は十分に会得していない。だから、大人ならばコンヴェンションに従って上手にすりぬけてゆくところを、彼は自分独自の方法で対処するか、方法も見つからぬままに体ごとぶつかるしかない。その結果、大人でも子供でもがあかすことのできない現実の意外な姿があきらかになってゆくわけだ。

(野崎孝訳 ライ麦畑でつかまえて 336頁 より引用)

野崎さんは、主人公の心情の変化や行動を起こす背景を鑑みるよりも、ストレートにアクションを楽しみ、また、歯切れ良い言葉の響きを楽しみながら翻訳をされていたのでしょうか。そういう意味では、野崎訳を完読した後に訪れるであろう“イノセンスへの感慨”とは、読者自身が自然に導いた“共同幻想”なのかもしれませんね。

【リズム感の野崎訳、カウンセリングの村上訳】

“イエローページ 村上春樹PART2”という書籍があります。タイトル通り、村上春樹の全作品を研究し批評を試みる文藝書なのですが、ここに、ライ麦の序章にあたる文章が、野崎訳と村上訳が並べられて掲載されています。村上春樹専門の研究本だからか、村上訳の方が野崎訳より優れているというニュアンスが感じられて玉に傷ですが、イントロダクションの続きとして、ここでも引用いたしますね。まずは野崎訳の序章を引用します。

(野崎孝訳)

もしも君が、ほんとにこの話を聞きたいんならだな、まず、僕がどこで生まれたかとか、チャチな幼年時代はどんなだったのかとか、(中略) そういった《デーヴィッド・カパーフィールド》式のくだらないことから聞きたがるかもしれないけどさ、実をいうと僕は、そんなことはしゃべりたくないんだな。(中略) ただ、去年のクリスマスの頃にへばっちゃってさ、そのためにこんな西部の町なんかに来て静養しなきゃならなくなったんだけど、そのときに、いろんなイカレタことを経験したからね、そのときの話をしようと思うだけなんだ。つまり、D・Bに話したことの焼き直しだな。

(イエローページ 村上春樹PART2 202頁 より引用)

次に村上訳の序章の引用を。

(村上春樹訳)

こうして話を始めるとなると、君はまず最初に、僕がどこで生まれたとか、どんなみっともない子ど

も時代を送ったとか、（中略）その手のデイヴィッド・カップフィールド“的なしょうもないあれこれを知りたがるかもしれない。でもはっきり言ってね、その手の話をする気になれないんだよ。（中略）今から君に話そうとしているのはただ、去年のクリスマス前後に僕の身に起こったとんでもないどたばたについてだよ。それは僕の具合がけっこうまずくなって、療養のためにここに送られてくる直前に起こったことなんだけど、実を言えばDBにだってその程度の話しかしてないんだ。

（イエローページ 村上春樹PART2 202頁 より引用）

それでは個人的に比較検証してみます。まずは野崎訳ですが、一見して“文体のスピード感”が圧倒的に目立ちますね！ “もし…だったら…なんだけど、でも…なんだよな”という感覚で、接続詞を多用して短いセンテンスを繋げる複文タイプで、想いを伝えたくても言葉が一杯に溢れてきて…上手く伝えられない！ という感情が伝わる文体です。一方の村上訳の文体は野崎訳と比べると落ち着きがありますね。腰を据えて“さあて、これから思い出話を聞かせてやろうかな”という雰囲気、じっくりと語りかける感覚があります。

次に、イエローページでは“野崎訳では一回だけだが、村上訳では二回も、君、という言葉が使われている”と述べています。つまりそれは村上作品の“海辺のカフカ”に於いて、主人公が“オルターエゴ”である“カラスの少年”に語りかける手法と、翻訳の手法が同等である、と唱えているのです。個人的にはオルターエゴまで踏み込まず、野崎訳は“歯切れ良いリズム感ある文章で、勢いよく物語をスタートさせることを重視する”であり、村上訳は“文中に、君、を二回も使用する手法を含めて、第三者である相手に対して常に語りかけている物語であることを心がけている”と捉えたいですね。

【ホールデンとサリーのデートの顛末】

さて、これ以降は個人的に両者翻訳を読み比べて、感じたことを記してみます。…その前に、簡単なライ麦のあらすじを記しましょう。先程の序章の“じゃあ、これから語り始めるよ”でスタートしてから、主人公のホールデン少年が高校を退学する顛末が描かれていきます。“スペンサー先生”“ス

トラドレイター” “アックリー” という教師や学友と一悶着を起こして、退学予定日より早く寮を抜け出します。そしてホールデンはニューヨークへと向かうのですが、ホテルで大人振って遊ぼうとしても上手くいかず、コールガールから酷い仕打ちを受けたりしてボロボロになります。翌朝、気を取り直して、疎遠にしていたガールフレンドの“サリー・ヘイズ”に電話をします。…それでは、その電話のシーンを読み比べてみますね。まずは、野崎訳を引用します。

(野崎孝訳)

「サリー？」と僕は言った。

「ええ、そう——そちらはどなた？」彼女はそう言った。ぜんぜんインチキなんだ。僕は彼女のおやじさんにこっちの名前を言ってあったんだもの。

「ホールデン・コールフィールドだよ。元気かい？」

「まあ、ホールデンなの！ ええ、元気よ。あなたは？」

「元気だ。ところで、君、どんな具合？ ——その、学校のほうだけど」

「なんともないわ。つまり——わかるでしょ？」

「よかったね。ところで、話があるんだ。君は今日忙しいかな、ってさっきから思ってたんだがね。日曜だけど、日曜だってマチネーは一つ二ついつもやってるだろう。慈善興行とかなんとかさ。どう、いっしょに行かない？」

「喜んで行くわ。ステキ」

ステキ、か。どんな言葉がきれいといって、僕はステキって言葉ぐらいきれいなのはないんだな。インチキなおいがするよ。

(野崎孝訳 ライ麦畑でつかまえて 165頁 より引用)

次に、村上訳の引用です。

(村上春樹訳)

「サリー？」と僕は言った。

「ええ、で、どなた？」と彼女は言った。まったく嘘くさいやつなんだよ。だって僕はお父さんが出たときにちゃんと名乗ってんだからさ。

「ホールデン・コールフィールドだよ。元気にしてる？」

「ホールデン！ 私は元気よ！ あなたは？」

「まずまず。で、君はどうなの？ 学校なんかどんな具合？」

「うまくいってる」と彼女は言った。「なんていうか——うん」

「そりゃよかった。ねえ、今日は忙しい？ 今日は日曜日だけどさ、マチネーも探せば少しはあると思うんだよ。慈善公演とかさ、そういうやつ。よかったら行って見ないか？」

「いいわね。ご機嫌」

ご機嫌ときたね。何がいやとって、こんなにいやな言葉ってないんだよな。まったくインチキくさい言葉じゃないか。

(村上春樹訳 キャッチャー・イン・ザ・ライ 180頁 より引用)

野崎訳では、ホールデンの口調が序章の時から変わらずに、多少の気取りを感じさせながらも喋りまくってるのが判ります。またサリーの口調にも同じ気取りが感じられます。ここから二人とも“お坊ちゃん、お嬢さん”という背景が見えてきます。しかもホールデンは、サリーが口にした“素敵”という言葉に批判するのですが、ここに前述の野崎氏が指摘した“徹底した偽善嫌い”という人物造形が伺えるのです。

次に村上訳を見ると、野崎訳と打って変わり、ホールデンもサリーもテンポ良く会話しています。ある意味、今風の若者の会話で、気取った言葉使いは見受けられません。上流階級出身という設定を重視してないのですが、寧ろ、ホールデンがあまりにも明るく描かれているので、前シーンに於けるコールガールとの一悶着、取り巻きのギャングに殴られて泣き出してしまったホールデン自身のネガティブな印象が、がらっと変わってしまうので、逆にインパクトを感じます。また野崎訳では“素敵”という言葉だったのが、ここでは“ご機嫌”と訳されています。ある意味、“…ご機嫌？ …聞き慣れない死語だなあ”という印象を受けます。ここでホールデンは“相手のズレ加減を指摘する、ひねくれ

た少年”と化するのです。

それでは、読み比べを進めましょう。デートの約束をこぎ着けたホールデンは、守備良く最良のデートを実行するのですが…だんだんとホールデンの言動が暴走気味になり、サリーが追い付けなくなっていきます。苛ついたホールデンは遂に、圧倒的な悪口を吐いてしまうのです。このシーンを引用してみますね。まずは野崎訳の引用から。

(野崎孝訳)

「さあ、ここを出ようや」と、僕は言った。「正直いって僕は、君と会っているとケツがむずむずするんだ」

それを聞くと、彼女、おこったねえ。天井を吹っ飛ばしそうにおこった。僕もそんな言葉は使うべきじゃないことぐらいわかってたし、ふだんなら言いやしなかったろうと思うんだけど、なにしろ彼女のおかげですっかり気をくさらしてたもんだからね。(後略)

考えてみると、なんとなくおかしかったな、ある意味で。それで僕は、突然、やっちゃいけないことをやっちゃったんだよ。つまり、笑っちゃったんだ。しかも僕の笑い声というのが、阿呆みたいにでっかいんだな。たとえば、映画館なんかで僕の後ろに坐ってたりしたら、僕だって身体を乗り出して、静かにしてくれませんかって、言うだろうと思うような笑い声なんだ。それでサリーの奴は、ますますカンカンになっちゃってさ。

(野崎孝訳 ライ麦畑でつかまえて 207頁 より引用)

次に、村上訳の引用を。

(村上春樹訳)

「さあ、もうこんなところは出ようぜ」と僕は言った。「君みたいなスカスカ女には限りなくうんざりだよ。はっきり言わせてもらえればね」

やれやれ、僕がそう言うと彼女はもう怒りまくったね。そんなこと口に出すべきじゃなかったってこ

とはわかっているんだよ。それに普通の場合なら、僕はそういう言い方はしなかったはずだ。でもそのとき彼女は僕をとことん落ち込ませてしまったんだ。（後略）

でもさ、まあなんというか、よく考えてみれば、何もかもがお笑いみたいなことじゃないか。それで僕は出し抜けにそのときいちばんやっちゃいけないことをやっちゃったわけだ。つまり吹き出しちゃったんだ。しかも僕の笑い方ときたら、ものすごく大きくて、馬鹿みたいなげらげら笑いなんだ。もし僕が映画館で自分の前に座っていたら、振り返って「ちょっと静かにしてくれませんか」と注意したくなるような馬鹿笑いなんだ。サリーはそれでますます頭に血がのぼった。

（村上春樹訳 キャッチャー・イン・ザ・ライ 225頁 より引用）

ここで気になる箇所を二つ、挙げてみます。一つ目は野崎訳では“ケツがムズムズする”と、ホールデン自身の不快感を強調してるのに対して、村上訳では“君はスカスカ女”と、単純に相手の悪口を言ってる状況で留めています。ここから野崎訳には“ホールデンは常に気取っていて、カッコつけてるイメージ”が感じられます。ケツがムズムズする＝自分の心情を真っ先に訴える“ナルシスト”となります。一方の村上訳には“第三者的なカメラが存在して、ホールデンの過去の状況を冷静に観察している”感覚があります。“…俺、あの時さあ…とんでもない悪口を言っちゃたよ”というシチュエーションが伺えます。

二つ目に気になった箇所は、野崎訳では“まあ、なんとなく…笑っちゃった”という訳が、村上訳では“よくよく考えれば、お笑いみたいじゃないか、だから…吹き出した”と訳されてる点です。両者共に、物凄くニュアンスが異なります！ 野崎訳ではやはり“カッコつけてるホールデンのイメージ”が付き纏い、ハハハ！ とクールに高笑いする情景が思い浮かびます。村上訳ではホールデンは完全にコメディアン役になり、ブブッ〜と吹き出すイメージですね。寧ろ村上訳は、前述のコールガールシーンの号泣から、デートを誘うシーンのあっけらかんさへと変化して、そして遂には大爆笑と続くので、情緒不安定な一面が浮き彫りにされています。却って野崎訳のホールデンは、序章からカッコつけてるイメージで通しているので、多少の涙や笑いはボロが出る程度で留まっている気がします。村上訳のホールデンは最初はニュートラルな状態なので、その後に感情の起伏が激しくなればなる程、

極端なイメージが加味されていくのです。

【フィービーの回転木馬で迎えるハッピーエンド】

…それではまた、ライ麦のあらすじを続けます。サリーとのデート以降、ホールデンは友人のカール・ルイスに会ったり、ベろんべろんに酔いながらまた、サリーに電話をしたりしますが、遂にやるべきことがなくなり、両親に見つからないように実家へ帰り、大好きな妹のフィービーとひとときを過ごします（ここで表題である“ライ麦畑で遊ぶ子供達を守る夢”を語ります）しかし、両親が帰ってきたので実家を抜け出し、頼りにしているアントリー二先生の家を訪れます。アントリー二先生の説教を聞くことで自分探しの糸口が見え始めるホールデンでしたが、その夜、眠っているホールデンの髪を先生が撫でた為に、それをホモセクシュアルな行為と勘違いして、先生の家から逃げ出します。完全に行く所が無くなったホールデンは…何処か郊外の果てに小屋を借りて、そこで聾啞者の振りをして生涯を送ろう…という突飛な発想を思い付き、お別れの手紙を妹のフィービーに送ります。しかしフィービーは、大きなスーツケースを引き摺りながら、兄さんと一緒に付いていく、と言い出します。驚いたホールデンは妹を叱りますが、フィービーは泣き出してぐずついてしまいます。仕方なくホールデンは、突飛な計画を取り止めにして、妹をあやす為に動物園へ連れていきます。なかなか機嫌が戻らないフィービーでしたが、動物園の奥にある回転木馬が冬でも営業しているのに驚き、兄に声をかけます。ホールデンは妹に回転木馬に乗ることを薦めます。そして、終幕が訪れるのです。…それでは最後に、その終幕シーンを読み比べてみましょう。まずは野崎訳の引用を見てみます。

（野崎孝訳）

彼女は走って行って切符を買うと、回転木馬のそこへ戻って行ったが、ちょうどそれが間に合った。それから彼女は、ぐるっとまわってまた自分の馬のところへ行き、それに乗ると、僕に向かって手を振った。僕もそれにこたえて手を振ったのさ。

雨が急に馬鹿みたいに降りだした。全く、バケツをひっくり返したように、という降り方だったねえ。

子供の親たちは、母親から誰からみんな、ずぶぬれになんかなってはいへんというんで、回転木馬

の屋根の下に駆けこんだけど、僕はそれから長いことベンチの上にかんばっていた。すっかりずぶ濡れになったな。特に首すじとズボンがひどかった。ハンチングのおかげで、たしかに、ある意味では、とても助かったけど、でもとにかく、ずぶ濡れになっちゃった。しかし、僕は平気だった。フィービーがぐるぐる回りつづけてるのを見ながら、突然、とても幸福な気持ちになったんだ。本当を言うと、大声で叫びたいくらいだったな。それほど幸福な気持ちだったんだ。なぜだか、それはわからない。ただ、フィービーが、ブルーのオーバーやなんかを着て、ぐるぐる、ぐるぐる、回りつづけてる姿が、無性にきれいに見えただけだ。全く、あれは君にも見せたかったよ。

(野崎孝訳 ライ麦畑でつかまえて 330頁 より引用)

続いて、村上訳の引用です。

(村上春樹訳)

フィービーは走って行ってチケットを買い、ぎりぎりのところで台に飛び乗った。それからぐるっと歩いてまわって、お気に入りの馬を見つけ、それに乗った。彼女は手を振り、僕は手を振り返した。それからもう正気じゃないみたいにとどと雨が降り出したんだ。それこそバケツを思い切りひっくり返したみたいになさ。いや、文字どおりの話だよ。子どもたちの親だとか、そこにいた誰もかもが、ずぶ濡れにならないために回転木馬の屋根の下に駆け込んだ。でも僕はけっこう長いあいだ、そのままベンチに座っていた。おかげでぐしょ濡れになっちゃったよ。とくに首とかズボンとかがね。ハンティング帽をかぶっていたおかげで、被害はそれなりに少なくてすんだわけだけど。それにしても濡れ鼠になったことはたしかだったね。でもかまやしない。フィービーがぐるぐる回り続けているのを見ているとき、なんだかやみくもに幸福な気持ちになってきたんだよ。あやうく大声をあげて泣き出してしまうところだった。僕はもう掛け値なしにハッピーな気分だったんだよ。嘘いつわりなくね。どうしてだろう、そのへんはわからないな。ブルーのコートを着てぐるぐると回り続けているフィービーの姿がやけに心に浸みた、というだけのことかもしれない。いやまったく、君にも一目見せたかったよ。

(村上春樹訳 キャッチャー・イン・ザ・ライ 359頁 より引用)

野崎訳では、終幕が近づくことで“カッコつけている鎧”を外した“素のホールデン”が現れて、冒頭から貫いてきた饒舌口調を、シンプルでソリッドな文体へと様変わりさせます。そのことにより“詩的な表現”が明確になっていきます。ワンカメラでホールデンをクローズアップ撮影している感覚で、他者が視野に入っても、すぐにフレームアウトして、心のフィルターを通過した物だけが鮮明に描かれていきます。“ぐるぐる、ぐるぐる、回り続ける”の反復のリズムが、それを象徴します。

そして村上訳には、多くのカメラを使用してあらゆる角度から、ホールデンとフィービーと周囲の人々が撮影されてる感覚が伺えます。雨が降る→周りの客が雨宿りで逃げる→ホールデンだけがベンチに残っている、というカットが積み重なっていく感覚です。落ち着いてフィービーを観察するホールデンは、保護者のようにリラックスしています。ここで強調される言葉は“嘘偽りなくハッピー”ですね。野崎訳の終幕は、フィービーの回転木馬の描写に“イノセンスの象徴の発見”が見出せるのですが、村上訳では“ライ麦畑のキャッチャーとしての初仕事を成し遂げた達成感”を感じますね。ひょっとしたらホールデン、自分探しが完了するかも？ …という予兆を村上訳は秘めているかもしれませんね。

【ライ麦畑を現実になぞらえたサリンジャー】

1951年に“The Catcher in the Rye”が初版された時、それは上々の成功を収めました。サリンジャーは、そこで得た印税を用いて、ニューハンプシャー州コーニッシュにある、美しい森に囲まれた土地を購入します。ささやかな小屋を建てて、生涯をここで過ごすこととなります。それはライ麦の物語内で、郊外的小屋暮らしを夢見たホールデン少年の理想が現実化した形となります。

サリンジャーは地元の高校生達と知り合い、交流を深めたそうです。小屋に若者達を招き、知的に語りかけるサリンジャーの姿は、“アントリーニ先生”と重なります。彼は正に“イノセントな若者を導くライ麦畑のキャッチャー”になろうとしたのでしょう。しかし、地元新聞に載せる目的で高校生からインタビューを受けたものの、それがマスメディアにスクープとして売られた為に…サリンジャーは激怒します。高校生との縁を立ち切り、そして、小屋の周りに高い壁を築いて、誰もが簡単に侵入

することを阻んだのです。

僕は、村上春樹訳の“キャッチャー・イン・ザ・ライ”の終幕シーンを読んだ時に、“ライ麦畑のキャッチャーという役割は、夢物語でなく実現出来るかもしれない”という予感を抱きました。史実を調べれば、著者のサリンジャーがそれを実践していたことが判るのですが、それでも正直な想いは…例えばインタビューを売られたとしてもショックを受けずに踏み留まり、相手を問い質して“新たなるモラル”を啓蒙して欲しかった。それこそが“キャッチャー役が担うべき責任”だと思うのです（その姿勢は小説執筆を続けることでも果たせる、と思っています）

1965年に発表した作品を最後に、サリンジャーは表舞台に現れなくなります。2000年代に“ライ麦畑でつかまえての続編”を出版しようとした他者が現れたのですが、サリンジャーはエージェントを通じて提訴し、阻止しています。日本に於いても、村上春樹訳のライ麦が出る時にも“訳者解説は掲載してはならない”と勧告を出したそうです。“The Catcher in the Rye”へ余計なイメージを付加してはならない。サリンジャーの生涯とは、自らが築き上げた“高貴なる城”を汚さずに保管し、管理をし続ける日々、だったのかもしれない。

…2010年1月27日、J.D. サリンジャーは他界します…。

（次回かえるちゃんブログは12月になります。2010年も残すところ後、一ヶ月。素敵な思い出を残したいですね☆）

コメント

1 ■斬新

拝読いたしました。

翻訳作品を比較することによって、翻訳者の原著に対する解釈を比較検討するという試みは、あまり見たことがなかったので、斬新でした。

興味深いし、面白いです。

M☆A☆S☆Hさんの記事が強い説得力を持っているのは、その精緻な分析によるという理由だけではなく、サリンジャーの作品や、野崎さんと村上さんのそれぞれの仕事に対する敬意や敬愛によると感じました。

余談ですが、野崎訳の「ライ麦畑～」で「素敵」という言葉を毛嫌いする主人公のことがずっと自分の頭にあったようで、無意識のうちに「素敵」という言葉を使わなくなっていることに今更ながら気が付かされました次第です。

syo-hyo 2010-11-21 13:59:29

2 ■Re: 斬新

>syo-hyoさん

こんばんは。早速のコメント、ありがとうございます。

syo-hyoさんには密かにお知らせしてたサリンジャーの読み比べブログ、やっと完成しました ^^

長文作業でしたが、結構、楽しかったです ^^

今から数年前ですが、野崎訳→松岡正剛氏の批評→村上訳と読み進めて…おや？と思ったんですよ。まだその頃は翻訳夜話のサリンジャーPTSD見解を読んでなかったのですが、明らかに村上訳のホールデンは神経症的に描かれているのが匂いました。…いつか、野崎・村上訳の差異を自分なりに整理したいなと思い…ようやく機会を得た次第です。

素敵という言葉、最近では僕の周りには使う方々が多いですね。個人的には、時代が進むにつれて世知辛い面が深刻になる今だからこそ、セルフ・ヒーリングで「素敵」という呪文を唱えるのかな、と思ってます。そういう面を気遣った上で春樹さんは「ご機嫌」と訳したのかも？ ^^ 敢えてギリギリの死語を用いて「ズレ加減」を表現したのかもしれないね。

僕のブログはサブカルチャーを多方面に扱うので、なかなか文学面に絞ることも難しいのですが、また機会ありましたらコメントをお願いいたしますね ^^

M☆A☆S☆H 2010-11-21 16:27:00

3 ■はじめまして

ライ麦畑。。

すごくビックリしました

読み比べ比較する

すごい説得力と惹き付けられる文章

奏でる音楽を聴きながら一気に読んでしまいました。

すごい。。

言葉が見つからないです。。。(*v.v)。

maco 2010-11-21 20:28:38

4 ■Re:はじめまして

>macoさん

こんばんは^^コメントありがとうございます^^

以前からライ麦畑の野崎孝訳と村上春樹訳との翻訳の差異が気になってて、いざ、記事を書き始めたら…止まらなくなっちゃったんです^^;

…一万文字超えてしまったんですが^^;最後まで読んで頂けて嬉しいです☆

僕は月に2回くらいしか更新しませんが、また機会ありましたら遊びに来てくださいね^^

ウェブマガジン感覚で、過去記事を暇な時に読みに来て頂いても、楽しめるかと思います^^

M☆A☆S☆H 2010-11-21 21:29:18

5 ■はい

また是非伺わせていただきますo(〃^▽^〃)o過去の記事も読ませていただきますね

ありがとうございます(ぺこり)

maco 2010-11-22 16:05:08

6 ■コメントありがとうございます☆

M☆A☆S☆Hさん

当方ブログにコメントいただきありがとうございます☆

もちろん、M☆A☆S☆Hさんのことは覚えておりますし、こうしてブログも拝読させていただいてますので♪

僕、最初M☆A☆S☆Hさんのこうしたアプローチに若干戸惑いを覚えていたのですが

当方のブログへのコメントで至極納得いたしました。

自分から宣言するのはなかなかどうして恥ずかしいものですが自分もビジネスというカテゴリではあまりワクワクしないタイプで

その中で「クリエイター」と自認することで

フフッと笑いながら必死こいてる人たちをかわして…みたいなそれこそ20代の頃にちょっと斜に構えていた自分も捨てきれないって最近すごく思っているんですよ。

M☆A☆S☆Hさんの今回のサリンジャーのお話はどうも仕事明けの頭には厳しいので

明日の休みにでもゆっくり拝読させていただくとして

M☆A☆S☆Hさんのような同じ年の方が

こうして自分をクリエイトし続けているのは

僕にとってもすごいうれしいことなんですよ。

カタチもアプローチも違っていても

80年代、90年代、00代を過ごした自分らにとって、その「カオス」と呼んでもいいような時代を過ごしたからこそ

お互いに認め合ったり楽しめるような気がするんですよ。

それは大人になったのかな？

とある意味歓迎しているところでもあるのですが。

うまくいえなくて申し訳ないのですが

本当にコメントがうれしかったので。

でも一日経って気の利いた返事を

と思ったけど失敗したかも（笑）

またうまく書けるようになって思います。

では長文失礼しました。

ありがとうございます☆

感謝はがきのマツモト 2010-11-22 19:13:01

7 ■Re: コメントありがとうございます☆

>感謝はがきのマツモトさん

こんばんは^^ 熱いコメントをありがとうございます^^ 嬉しいな^^ やっぱり丙午ですね！

ちなみにこの記事で最初にコメントを頂いたsyo-hyoさんも我々と同年代ですよ^^

…これ、前にツイッターで話したかもしれませんが、前に僕はとある医療系企業のIT部門？にいたことがあって、そこで、やはり同年代の開業医の先生と会ったんです。

仕事を絡めてなんですけど、段々と、一緒に昼食や酒を飲んだりするようになって^^

その時に僕は、自分の前職のことを話したんですよ。マツモトさん宛てのコメントにも書いた、人材派遣の営業…というか支店長だったんですが^^；実は長期間、一日も休まずに支店に泊まり込んで仕事をしていました^^；

…その話をしたら、開業医の先生も当直の実情を話してくれて^^；

結論は「一度、落ちる所まで落ちたら、耐性が出来るよな」でしたね^^

恐らく、マツモトさんを含めて、ツイッターで知り合った丙午仲間はここが共通すると思ってるんです^^

…話が全然、ライ麦畑と関係ありませんが^^；ただ、僕は上記の記事で「サリンジャーは実際にライ麦畑のキャッチャーになれたはずだ」と結びました。

サリンジャーの場合はPTSDの可能性があったので、落ちる度合いは僕や開業医の先生以上ですが、それでもライ麦やグラス・サーガを記していたのだから…自身の不安に呑み込まれる前に、自身の小説を書き続けることで立ち向かえる…と思ったのですが…。

僕も長くなりました^^

明日、ゆっくりと拝読なさってくださいね^^

また機会ありましたら、気軽に遊びにきてください☆

M☆A☆S☆H 2010-11-22 20:13:07

8 ■こんにちは♪

M☆A☆S☆Hさんの今回の

サリンジャーの翻訳を

比較するという企画、読ませて頂きました^^

面白いと言うより

翻訳を比較するという本の読み方は

思いつきませんでした・・・

多分私が呼んだのは野崎氏の翻訳だと思います。

勿論村上氏のも読んでますが、漠然と

解釈が違う、、、程度でした^^

>サリンジャーの生涯とは、自らが築き上げた“高貴なる象徴の城”を汚さずに保管、管理し続ける日々、だったのかもしれない。

まさにこの言葉に集約されてると思います・・・

拙いコメントご容赦ください^^

neo 2010-11-23 12:14:26

9 ■Re: こんにちは^^

>neoさん

こんばんは^^

本日は勤労感謝の日でも仕事をしていたので、コメントを返すのが遅くなりました^^;

先日、syo-hyoさん宛てのメッセージにも記したことなのですが、恐らく、村上春樹というビッグネームの作家が翻訳をしていたからこそ、マーケティング的な意味合いで今回の翻訳比較は成功したのかな、と思っています。

これが、アーサー・C・クラークの幼年期の終わりを、福島正美訳と池田真紀子訳で翻訳比較しても、同じ様な効果は出ないかもしれませんね。

寧ろ、幼年期の終わりって…何?←という問いに対して解説する方が、面白いブログが書ける気がします^^

サリンジャーが隠遁生活を送っていた事実は…意外と世間には知れ渡ってない気がします。

neoさん向けの話だと、サリンジャーの隠遁生活は、ピンクフロイドの創設者、シド・バレットの脱退後の隠遁生活と重なる所がありますよね^^

コメントありがとうございました。また機会ありましたら、お越しく下さいね☆

M☆A☆S☆H 2010-11-23 21:21:31

10 ■わー

ライ麦畑は読んだことないんですが、翻訳で全然違う読物になりますね～。

こうやって検証するとより違いが露呈するもんっすね。

マッシュさんには色々なことをどんどん掘り下げて行って欲しいっす!!!

しかし、今回はより長いっすね(笑)

カッコイイ!!!

肝心のライ麦畑を読んだことないので理解出来ないかもしれませんが、じっくり読んでみますね。

何事も真剣にやっていると自分の経験値に繋がっていくと改めて実感する今日この頃でえーす。

来月もブログ楽しみにしてまーす。

特殊磁気テープス 2010-11-23 22:46:49

11 ■Re: わー

>特殊磁気テープスさん

おはようございます ^^ 昨晩は深夜にペタしたら、力尽きて寝てしまいました ^^ ;

今回のブログは画像無しで一萬文字以上なので…書いた本人もびっくり ^^ ;

長いからコメント少ないだろうな…と思いつつも、意外に反響があり、嬉しい悲鳴です ^^

では、特殊磁気テープさん向けのコメントを ^^

実は僕、ライ麦を初めて読んだの18歳くらいの時だったんだけど、その当時は…ユングの心理学とかコリン・ウィルソンの「アウトサイダー」を好んで読んでて、果ては…アレクスター・クロウリーの「法の書」を読んで「これだ!」と思ってたオカルト青少年?だったので、ライ麦を読んでも…ピンと来なかったんです ^^ ;

ライ麦の中で「カール・ルイス」というキャラが登場するのですが（足は速くない ^^）、その彼がセックスと東洋思想の関連性をバーで酒を飲みながら話すのですが、18歳の頃の僕は、彼が一番、好きでしたね ^^

…そんなこんなで20年以上も月日が経ち、村上春樹訳のライ麦を再読したら…意外に全編がすーっと入ってきました。主人公のホールデンを繊細ではなく神経症として捉えると、上記のカールはそんなホールデンが意味嫌う要素を持ちながらも、ごく当たり前の人間臭いキャラクターであるのが、春樹訳から伝わってきました。そんな臭い人間?がうようよと現れながら、成す術も無いエヴァンゲリヲンの碇シンジ的な主人公の狼狽振りを楽しむ要素が、村上春樹訳にあるかもしれませんね。

…こう書くと、春樹さん、酷い人間みたいですが ^^ ;

次回のブログは柔らかくします ^^

長文は暫くおあずけね ^^

また遊びに来てくださいねー☆

M☆A☆S☆H 2010-11-24 08:17:00

京都買います

2010-09-20 テーマ：特撮・ゲーム・アニメ・ヘビメタ・PUNK



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

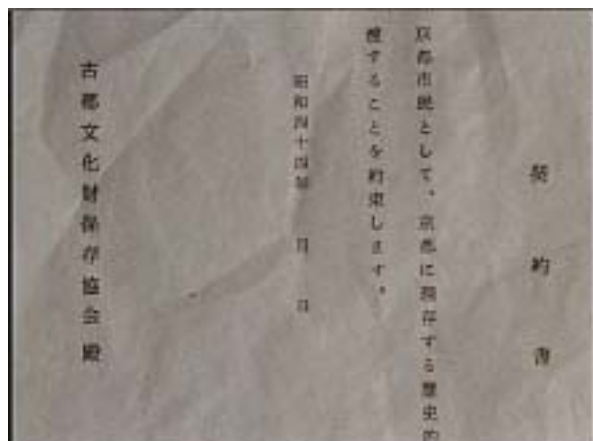
舞台は1960年代の京都。古寺の仏像が消える様に喪失する盗難事件が相次いだ。警視庁に協力する民間組織、科学捜査研究所 (Science Research Institute 通称SRI) が、この難事件の解明へと乗り出す。SRIの牧史郎は、仏像研究の権威である藤森教授の研究室を訪れた。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

牧はそこで、教授の助手である須藤美弥子と出逢う。愛惜しそうに仏像の補修を行う美弥子の姿を見つめながら、牧は彼女に、仄かな印象を抱き始める。

研究室での捜査を終えた牧は、同僚に連れられて京都のゴーゴー喫茶へと赴くが、「京都を訪れたのに、わざわざ、こんな所に来なくても…」と、流行りの喧騒に辟易してしまう。そんな牧を傍目に、先程の美弥子が突然、店内に現れる。彼女はゴーゴーを踊る若者達に近付き、ビラ紙を配り歩いた。そこには以下の文面が書かれてあった。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

『京都市民として、京都の文化財産を譲渡する事を認めます』

それは、京都を売る誓約書であった。若者達は面白がり、次々と署名していく。一部始終を目撃していた牧は、誓約書を回収して店を出ようとする美弥子に声をかける。逃げ出そうとする美弥子。寺道を逃げる美弥子を追い駆ける牧。遂に引き留められた美弥子は、観念するかの様に告白する。

「私は、京都を…買ってしまいたいのです…」

その後、牧と美弥子は、古寺を静かに巡りながら、互いに言葉を交わしあった。京都一面が臨める楼門の上階で、美弥子は、経済発展を象徴するコンクリートのビルと、古式由縁の寺院が同居する街景を指しながら、こう語る。

「この喧騒の景色が、一千年前には美しい文化の栄えた場所であるというのが…信じられますか…」

そして美弥子は真っ直ぐに牧を見つめて、不変の情熱を湛えた瞳で、詰問する。

「だから私は、仏像を愛する人だけが住む都（みやこ）を夢見ているのです。牧さんはこのことを、どの様に考えますか？」



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

美弥子の真摯な問いかけに、牧は戸惑いと好意を混ぜた表情で返答する。

「…ええっ？ 僕は…仏像よりも、現実生きる人間の方が好きかもしれないな」



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

屈託のない牧の返答に、美弥子の表情は揺らいだが…やがて、微笑みを添えた柔らかい表情へと変わっていった。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

そして二人は、ささやかな茶屋で睦まじく横並び、甘いぜんざいを食べ始める。牧がまた、屈託無く話しかける。

「たまには研究室から出て、こういう所に来るのも悪くはないでしょう？」

「…私、生きている男性の方とお話するのも…悪くはないな、と、思います」

と、美弥子は答える。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

牧は、美弥子の告白に焦り、箸が止まってしまう。美弥子は、牧の視線を避ける様に、はにかみながら顔を伏せて、ぜんざいに箸をつける。二人の間には穏やかな空気が流れていった。

牧は、美弥子への好意が恋心へと変わっていくのを自覚した。その心持ちを抱きながらも、未だに止まない仏像喪失事件の捜査を、牧は続けなければいけなかった。犯行現場には、必ずと言って良い程に、托鉢の修行僧が出没した。牧は、美弥子の周りにも同じ修行僧が徘徊していた事に気付く。…改めて美弥子を呼び出した牧は、彼女が京都を買おうとする理由をもう一度、聞いてみるのだが…何かを察した様に、急に美弥子は怯え始める。

「…許してください。私はただ、仏像を愛しただけの女、です…」

そう言いながら、引き留める牧の手を解き、美弥子は逃げてしまう。立ち去る彼女の後ろ姿を、牧は神妙な面持ちで見つめていた。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

牧は、美弥子への恋心と、挙動不審な彼女から漂う疑惑との、二極の感情に葛藤する。意を決して、美弥子の尾行に踏み切る。古寺に入り仏像を拝む美弥子を盗み見る牧。彼女の敬虔な姿に微笑む牧であったが、直後に…思いも寄らない状況に遭遇する。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

美弥子は密かに、本堂の柱に小さな物体を取り付けて、何事もなかった様に立ち去っていく。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

彼女が去った後に、牧は、取り付けられた物が何であるかを確認する。それは、仏像を原子構造に分解して、電磁波に乗せて遠隔地に転送させる機能を持つ、最新鋭の発信器であった。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

…恋人にふられた様な失意の表情の俛、牧は京都府警に戻り、SRIの仲間に発信器を差し出す。そして、須藤美弥子と発信器の関係を告げて、更に、発信器を逆探知する事で仏像の転送先を突き止めて、主犯を逮捕する提案をする。…淡々とした口調で事務的に振る舞う牧であったが、その声の中に、今にも泣き出しそうな響きが含まれているのを、SRIの仲間は誰一人、気づかなかった。

その夜、発信器は予測通り作動する。…遠く離れた所にある無名の寺院の一室に、仏像が転送される。そこには、今までに盗まれた数多くの仏像が鎮座し、その中心に、藤森教授、美弥子、修行僧達が集まっていた。教授の傍らには、美弥子が集めた京都譲渡の誓約書が、山の様に積み重なっていた。

「例え、冗談と捉えたとしても、こんなにも多くの京都市民が、自らの街の文化遺産に関心を持っていない事が証明された。我々が京都を買い取り、仏像を相応しい場所へと導いてあげましょう」

教授の言葉を聞き、そっと涙を零す美弥子。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

突然、一室の襖が開き、SRIと京都府警が進入する。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

急な出来事に動揺する美弥子は、警官の背後に佇む牧の姿を見て、更に衝撃を受ける。(…牧さんは捜査を遂行する為に、私を密かに尾行していた…) 美弥子はそのことを、一瞬にして察知する。教授は仏像盗難の主犯として、抵抗無く逮捕される。パトカーで連行される教授に駆け寄ろうとする美弥子。彼女を止める牧。しかし美弥子は、牧の制止を振り解くと、憎悪と悲しみが混じった瞳で、彼を睨み付ける。

「…仏像以外の者を信じようとした、私が間違っていました…」

美弥子の言葉に衝撃を受けて、立ちすくむ牧。美弥子は震えながらも踵を返し、夜の寺道の奥深くへと消えていった…。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

事件は解決した。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

しかし、牧は一人だけ京都に残り、宛ても無く彷徨う様に古寺を巡り続けた。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

それはまるで、事件後に失踪した美弥子の姿を、別れた恋人として探し求める様にも見えた。

とある古寺に訪れた牧は、偶然、そこに居合わせた尼僧に声をかける。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

振り返る尼僧の顔は…美弥子、その者であった。尋ね人に出会えた衝撃で声も出せず、「…美弥子さん…」と微かに言葉を漏らす牧。しかし、その尼僧は、こう返答をした。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

「…正連尼と申します。須藤美弥子はもう、お会いすることが出来ない、と伝えておりました。彼女は、仏像と共に暮らすのが幸せなのです。どうか貴方様も、彼女を忘れてあげてください…」



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

“思慕” “未練” “贖罪” “諦念” …あらゆる感情が渦巻きながらも、引導を渡した尼僧の言葉に

成す術も無く…牧は踵を返して立ち去ろうとした。しかし、…美弥子の姿をもう一度、見つめたい…、



その一心の想いで振り向いた彼が、目にしたのは…、

(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

尼僧の頭布が垂れ落ちると、その下には…石質の仏像が一体、静かに佇んでいた。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

仏の顔は、美弥子に似ていた。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

目から、涙の様なものが零れ落ちていった。



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

…どうする事も出来ずに牧は、泣き顔を見られない様に顔を両手で覆い、その俣、逃げる様に走り去っていった…。

くまちゃん『悲しいおはなし、だね・・・(´・ω・`)』

マサユキ「うん…。これは“怪奇大作戦”という、60年代に放映されたTVドラマの、第25話のお話です。怪奇大作戦は、ウルトラマンやウルトラセブンを作った“円谷プロ”が制作しました。怪獣は出てきません。昔の海外TVドラマの“トワイライト・ゾーン”や“アウター・リミッツ”みたいな、現実世界を舞台にしているけど科学では解明出来ない不可思議な出来事を扱った、ミステリー仕立てのTVドラマでした」

くまちゃん『マサユキは子供のころ、うるとらまん、好きだったよね(・ω・) かいきだいさくせん、も、子供のころに見てたの?(・ω・)』

マサユキ「んにゃ^^ 実はね、この怪奇大作戦の“京都買います”を知ったのは、僕が高校生の頃なんだ。当時、愛読していたアニメ雑誌に、特撮ドラマを専門に紹介するコンテンツがあってね。そこで初めて知ったんだ。それは“池田憲章”さんという方が書かれた記事で、とても印象深く、丁寧に文章が書かれていた記憶がある。…あれから25年経って、思いきってDVDを買って、初めて観ることが出来たんだ！」

くまちゃん『しゅごい!(☆ω☆) 25年も待つなんて、“天吾”と“青豆”みたいだね～(^ω^)
・・・そんなに待ってて、怖くなかった?(・ω・)』

マサユキ「それがね^^ 25年前に読んだ記事の印象通り、だったんだ☆ 寧ろ、それ以上に感動した! …確かにね、40年前に作られたドラマだから、今の時代のドラマを見過ぎた目で見ると、テン

ポがスローだったり、古臭さく感じるところもある。…でもね、“京都買います”は短所よりも長所が目立っていた。寧ろ、60年代の時代だからこそ、“純粹”に“詩的”に撮れたんじゃないかなあ、って思ってた^^」

くまちゃん『純粹なんだあ(☆ω☆) いいなあ(^ω^)]』

マサユキ「いいでしょ^^ 特に役者さんの演技が迫真に迫っていて、感情がもろに伝わる演技をしているんだ☆ このドラマは、牧史郎役の“岸田森”さんと、須藤美弥子役の“斎藤チヤ子”さんの恋愛ドラマが主軸なんだけど、お二人の微妙な表情、視線、目の潤いから頬の張り具合、そして台詞までもが、絶妙に混ざりあっているんだよ♪」



(画像引用元→[\(C\)円谷プロ 怪奇大作戦DVD Vol6](#) より引用)

マサユキ「チヤ子さんが“仏像は私だけのもの”と言うシーンがあるんだけど、伏せ目がちで潤いのある表情を魅せるんだよね~☆ その仕草と、声のトーンのくすぐったさが絶妙に絡んでいるのさ^^ 岸田さんとチヤ子さんがぜんざいを食べるシーンもマジかわいいよ♪ 少年っぽい表情の岸田さんと、固い心がほぐれて無邪気に微笑み恥じらうチヤ子さんの、瑞々しいツーショット☆」

くまちゃん『いやん(*^ω^*)』

マサユキ「^^ … えっとね、“京都買います”は“実相寺昭雄”さんという方が監督されました。以前に僕のブログでも、実相寺監督が撮ったウルトラマンやウルトラセブンの特集をしたかと思います。一言で言えば、トリッキーなカメラワークを駆使して実験的な映像を撮られる方です。それが“京都買います”では、役者の表情をクローズアップする手法を多用することで、岸田さんやチャ子さんの演技を十分に引き出していました。更に、オール京都ロケで古寺の魅力を存分に伝えながら、BGMに“フェルナンド・ソル”による“モーツァルトの魔笛による変奏曲”のクラシックギターが全面に流れます。正に“ロマンチズム”を緻密に演出した作品ですね^^

…但し、欠点もあります。ミステリー物として物語を見たら、30分の上映時間内に謎解きがはまらずに失敗しています…。また、仏像を転送する方法として“カドニウム光線”という設定を登場させているのですが…科学的に納得いく説明をしていません！ …それでも、欠点を補う役者の迫真の演技力と、高品質のロマンチズムの“双頭の長所”が、良質の化学変化をもたらしました」

くまちゃん『名作だね～（・ω・）』

マサユキ「恐らくね、特撮マニアしか知らないドラマだと思うんだ。60年代物で古いしね。それでも、過去に名作が埋もれているという事実と、監督もスタッフも役者も精魂を籠めて、マイナーな現場かもしれないけどメジャーに匹敵する程の才能を注ぎ込んだという事実が、最も大切なことだと僕は思っている。…今の僕はアニメやゲームの仕事からドロップアウトしているけど、かつてエンタメビジネスを共にした仲間が、純粋に表現するということ以前に、ビジネスを成り立たせる環境の維持に苦労していることを、今でも伺っています…。前回のジュノ・リアクターのブログ記事で“金権主義”という言葉を使ったけど、裏を返せば、理想の表現を実現させるには金が必要だ、ということになるしね…。

…それでも、ビジネスを度外視した純粋な表現意欲を、クリエイターならば常に抱くべきです！ プロとかアマチュアとか、予算や視聴率、売上目標、マーケティングとか、色々と付き纏うものはあるけれど、“エンターテイメントとして表現したい”という意識は、そのノイズとは無縁の場所にあるはずです！

“京都買います”は名作であると同時に、“クリエイターとは何か？”を改めて問う、リトマス試験紙の様な存在、なのかもしれませんね^^」

(次回のかえるちゃんブログは10月にお贈りします。お楽しみに☆)

コメント

1 ■こんにちは

ペタを有難うございます。カツオと申します。

あまりにもドストライクで、面白く、即3ページほど読ませて頂きました。

岸田森は存在感が様々な役の邪魔にならない感じがいいです。怪演系が多いですが。

今で言う所の加瀬亮～オダギリ・ジョー～嶋久作のエッセンスを網羅しているような。

ほめ過ぎかしら。

カツオ 2010-09-20 17:26:08

2 ■Re: こんにちは

>カツオさん

はじめまして ^^

こちらこそ、ペタ返しとコメントをありがとうございます。

僕のブログは最近はどんどん長文化の傾向なので ^^ ; 3ページも読んで頂いて恐縮&うれしいです☆

特にこの「京都買います」は思い入れ深い作品なので、丁寧に書こうと心がけました。

岸田森さん、いいですよ～

しかもカツオさんの岸田森→オダギリジョー見解は見事ですね！

思いつかなかった ^^

流石です☆

また遊びに来てくださいね♪

僕もお伺いいたします ^^

M☆A☆S☆H 2010-09-20 18:50:36

3 ■ウァァ-----。(°´Д`°)。-----ッ!!!! 感動した！

「…ええっ？ 僕は…仏像よりも、現実に生きる人間の方が好きかもしれないな」

牧さん！それマジ告白！！

Ogaogazamasyo 2010-09-20 19:24:24

4 ■Re: ウァァ-----。(°´Д`°)。-----ッ!!!! 感動した！

>ogaogazamasyoさん

こんばんは^^はじめまして☆

ですよね^^

牧さんも美弥子さんも前半はお互いに告白してて、いい感じだったんですけどね~☆

牧さんが仕事熱心でなければ良かったのに…^^;

M☆A☆S☆H 2010-09-20 19:40:25

5 ■思えば初コメです(^▽^)ノ

私も大好きです。

「怪奇大作戦」

“京都買います”

“青い血の女”

が、特にお気に入りでございます☆

ゑり助 2010-09-20 23:02:01

6 ■Re: 思えば初コメです(^▽^)ノ

>ゑり助さん

おはようございます^^

初コメ、ありがとうございます☆

なうでやり取りすると、既にコメントも付け合ってる感覚になりますよね。

僕もそうです^^

怪奇大作戦ファン、続々増えてきますね~

“青い血の女”ですか…怖かったですね、あれT o T

僕は桜井浩子さんの出た“恐怖の電話”も好きでした。

怖いけど…心に沁みる名作佳作が結構、ありましたね。

では、また機会ありましたら宜しくお願いします^^

もしくはいつもの様に、なう、にて^^

M☆A☆S☆H 2010-09-21 07:35:10

7 ■はじめまして

実相寺さんのファンですが、あまり知識がなくてこの作品は知りませんでした。

凄く見てみたい気分になりました。

ありがとうございます～

特殊磁気テープス 2010-09-21 12:30:26

8 ■Re:はじめまして

>特殊磁気テープスさん

こんばんは、初めまして。

以前にペタのやり取りをしていましたね（確か、クローネンバーグ関連？）

怪奇大作戦シリーズは、この「京都買います」だけが特別で、それ故にマニアの間で高評価になっていますね。

ウルトラセブンで言う「第四惑星の恐怖」に近い立ち位置かもしれません^^

特殊磁気テープさんは実相寺監督作品にお詳しいんですね。

僕はウルトラシリーズやシルバー仮面しか知らないので、ATG系の実相寺作品でお薦めあれば、機会ありましたら教えてください^^

今後も宜しくです☆

M☆A☆S☆H 2010-09-21 17:04:40

9 ■こんばんは(^-^*)/

コメント欄に何度も失礼します。

なるほど、そうなんですね。勉強になります。

ウルトラセブンの第四惑星の悪夢（悪夢ですよ？）は大好きなのでより興味が湧きました。

残念ながら実相寺作品はそれ程詳しくはないです。すいません。

ただ、実相寺監督の哥（うた）っていう映画はかなり面白く大好きです。ウルトラマンタロウの人だったか？主役の人が色々な意味で格好よいですよ。オススメです。

曼陀羅って映画は映像の構図が凄いですね。

内容は左翼思想な感じだった気がします。忘れてしまった（笑）

あと、実相寺作品ではなく実相寺さん出演の怪獣のあけぼのは面白かったですね。

んな感じですね。

また、ブログ楽しく拝見させていただきます。宜しくお願い致します。

では～

特殊磁気テープス 2010-09-21 20:04:06

10 ■Re: こんばんは(^-^*)/

>特殊磁気テープスさん

また、こんばんは^^

実相寺ATG作品、教えてくれてありがとうございます☆

哥と曼陀羅ですね。

機会みて、見つけておきます^^

あとは…遺作のシルバー假面を観るか観ないか…ですね^^;

また何かありましたら、よろしくです～

良い夜を☆

M☆A☆S☆H 2010-09-21 21:42:43

11 ■弥七さ～～～ん！！

しゅごい(▽+*)

知識の泉です、全部、初耳でしたもん♪

GOTHICアートデザイナー伽椰子 (since 2008) 2010-09-27 12:21:10

12 ■Re: お銀さ～～～ん！！

>GOTHICアートデザイナー伽椰子 (since 2008) さん

こんにちは^^

このお話はマイナーだから、あまり知られてないからね^^

僕が3歳頃の年代に作られたし^^

～でも名作です☆

…今度、機会みて「お銀」ネタでブログ書こうかしら(*^-^*)

M☆A☆S☆H 2010-09-27 12:44:31

小説【1989年】（土居豊 著）を読んで

2012-12-01 テーマ：書評



(イメージ画像→[引用元](#))

ツイッターで出会った友人、土居豊氏の新作小説を紹介し、書評を記します。

小説『1989年』発売開始！ブックログのパブーサイトにて

<http://p.booklog.jp/book/60737>

土居豊の新刊小説（Kindle版）『1989年』発売開始！

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00ABV1M28/>

土居豊 プロフィール

(ウィキペディア <http://ja.wikipedia.org/wiki/土居豊> から引用)

日本の文芸評論家、作家。「文芸レクチャー」という肩書きも用いる。

大阪府生まれ。大阪芸術大学文芸学科卒。2000年村上春樹論の連載で関西文学選奨奨励賞受賞。2005年音楽小説『トリオ・ソナタ』を刊行し、小説家デビュー。園田学園女子大学などで講師を務める。村上春樹、司馬遼太郎から谷川流まで、現代の阪神間文学を幅広く評論対象とする。

僕は土居氏とは、ツイッターの1Q84ハッシュタグを通じて知り合いました。

当時は『1Q84 BOOK3』が刊行されたばかりで、お互いに書評や意見交換をツイッター上で交わしたものです。併せて、土居氏の小説『トリオ・ソナタ』や評論本『村上春樹の工口ス』を購入。ツイッターのコミュニケーションで土居氏の御人柄に触れ、著作で土居氏ならではの筆力や思索視点を確かめました。

忘れられないのは、2011年3月11日の震災直後に土居氏が述べた、以下の発言です。

被災地以外にお住まいの子育て家庭の皆様。小さな子どもは、テレビ映像からも強くショックを受けます。地震報道をつけっぱなしにしないで、できたらアニメを見せてあげたり、絵本を読んだりしてあげましょう。今すべきことは、各自が自分の日常生活を維持することだと思います。

(土居豊 <http://twitter.com/urazumi> 2011/3/12 から引用)

非常時に、この発言を咄嗟に行った土居氏の御人柄には、確かな誠実さと優しさが顕れています。僕は著作や実績以上に、土居氏の御人柄に共感を覚えました。



(イメージ画像→[引用元](#))

震災翌年、土居氏は『ハルキとハルヒ 村上春樹と涼宮ハルヒを解説する』という評論本を発行します。題名通りに純文学とライトノベルやジャパニメーションとの接点を考察する本です。そこで土居氏は「物語の癒し」を提唱しました。震災後の殺伐とした現実には打ち砕かれない為に、震災後だからこそ文学が求められている、という主張を掲げたのです。

物語の力は、例えば演説の言葉のように即効性がある訳ではない。集まった大勢の人々を鼓舞し、一つの目標に向かって団結させるようなものではない。しかし物語は、演説の言葉が忘れられ、一つの

イデオロギーが廃れて、人々が全く異なる思想を信じるようになって、常に普遍的な「愛と勇気」の力を、人々に思い起こさせる。（中略）どんなことがあっても、物語の力で、人はいつか再生し、死を乗り越えて、再び生に向かうことが出来るだろう。

（土居豊 ハルキとハルヒ 村上春樹と涼宮ハルヒを解説する から引用）

その土居氏が、僕のアメブロ連載していた『熊の童話』の最終話を、御自身のブログで紹介してくれたことがありました。

クリスマスの奇蹟がもしあるのなら

<http://ameblo.jp/takashihara/entry-11116122480.html>

僕は日々の生活合間に小説を執筆してましたが、プロの作家ではありません。だからこそ、評価は全く期待していませんでした。この姿勢は、子供の頃は苛められっ子で、周りから無視されることに慣れていたのも関係したかもしれません。大人になりアニメやゲームなどの創作系の仕事に就いても、手がけた作品はマニアックと言われ続けました。満足いく評価など得られない、と諦観していたからこそ、土居氏の突然の評価に、心の底から喜びが湧きました。それ以降も機会をみて、土居氏は僕の「俳諧連句」「散文詩」「三島由紀夫評論」を主題にしたブログを批評してくれました。だからこそ恩返しで、土居氏の新作小説『1989年』を、紹介書評したいと思います^^



（イメージ画像→[引用元](#)）

小説『1989年』発売開始！ブックログのページにて

<http://p.booklog.jp/book/60737>

土居豊の新刊小説（Kindle版）『1989年』発売開始！

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00ABV1M28/>

それでは書評に入ります。尚、『1989年』は有料電子書籍なので、可能な限り、小説内容に関する引用を避けますが…少々のネタバレはお許し願えればと思います^^；

【以下文章は、ネタバレに注意してください！】



(イメージ画像→[引用元](#))

この中編小説は、筆者が1999年に上梓した小説の第1作『パプ口のいる店で』を、全面改稿したものです。といっても、『パプ口のいる店で』は自費出版なので、本当の意味での小説第1作は、2005年の『トリオ・ソナタ』ということになります。

(土居豊 1989年 あとがき から引用)

上記引用で土居氏が述べる通りに、新作小説『1989年』は10年以上も前の処女小説を改稿して、今の時代に贈られたこととなります。そして実質上の第一作、出版社から書籍として発行された第一

作は『トリオ・ソナタ』となります。

…ここで【ネタバレ】です^^ 『1989年』の改稿前作『パプロのいる店で』と、『トリオ・ソナタ』との関係は、土居氏が評論対象にされてる作家、村上春樹氏の、『螢』と『ノルウェイの森』との関係、『ねじまき鳥と火曜日の女たち』と『ねじまき鳥クロニクル』との関係、『街と、その不確かな壁』と『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』との関係に似ています。

つまり、先に発行された中編小説の内容に加筆して、長編小説へと仕上げられているのです。だからこそ、『トリオ・ソナタ』を先に読んでみると、新作『1989年』は感慨深く読めるでしょう。「あっ！このシーン、何処かで読んだことある！」というサプライズ感覚が楽しめます^^



(イメージ画像→[引用元](#))

主人公の二人の少年、雨路紫苑と原玻璃は、ジャズ喫茶「ピカソ」でいつも語り合う。恋について、人生について、この時代について。マスターのP.M.は、そんな二人を温かく見守る。紫苑が15歳の少女と「正式な文通」を始めたことから、物語は不思議な世界へと進んでいく。

(土居豊 1989年 本作の元になった小説『パプロのいる店で』著者による紹介文 から引用)

『1989年』は、インターネットが普及する以前の時代で、「文通」というコミュニケーションを主題にして描かれています。『トリオ・ソナタ』でも同様の文通要素と併せて、ウィーンを舞台にした、クラシック交響楽団の指揮者を目指す日本人主人公の、異国人との交流と苦悩が同時進行していきます。時系列も国境も複雑に絡み合う「ポリフォニー演奏」の物語が『トリオ・ソナタ』で楽しめます。

前述したように、僕は『トリオ・ソナタ』を先に読みました。だからこそ今回、『1989年』を初

読した際に、真っ先に「懐かしさ」を覚えました。同時に『1989年』から『トリオ・ソナタ』へ発展する「進化の過程」を、一読者として楽しむことが出来ました。別視点で『1989年』は、土居豊氏の創作の「原点」でもあるのだな、と捉えました。



(イメージ画像→[引用元](#))

まだポケベルもケイタイもなく、インターネットが夢物語だったあの頃、僕らは心の底から怖れていた、あの予言を…。

(土居豊 1989年 本作の元になった小説『パブコのいる店で』Amazonサイトでの紹介文 から引用)

今の時代はインターネットやSNSが全盛の時代です。文通は死語になりつつも、年代物のワインのようにファンタジックな香りを放つでしょう。文通オンリーの古き良き時代の物語を、敢えて今の時代に贈る土居氏は、策士かもしれませんね。

また上記引用にある「あの予言」とは、「1999年7の月、空から恐怖の大王が降ってくる」というものです。即ち、「ノストラダムスの大予言」のことです。10年以上の月日が経つ今となっては、予言が成就されなかったのを誰でも承知しています。…それでも、2001年には「9.11同時多発テロ」が起きました。その後、「世界金融危機」「アラブの春」「東日本大震災」等が勃発、1999年の予言を酌んだかのように、世界は激変していきます。今、この時に、1999年の予言を恐れ振り回される若者の物語を提供する土居氏の姿勢には、強固なメッセージ性が感じられます。



(イメージ画像→[引用元](#))

2) 山田兼士氏 (大阪芸術大学文芸学科教授) による書評

大変力のこもった作品、若々しくも落ち着いた語り口と時代認識の真摯さに共鳴をおぼえた。途中で語り手の視線が移動したり、謎解きのスリルを未解消のまま終わったり、多少気にかかる部分もあるのだが、まずは力技で読ませる技量は大したもの。(後段省略)

(土居豊 1989年 電子書籍版特別付録 から引用)

個人的見解ですが、『1989年』『トリオ・ソナタ』に見られる土居氏の小説文体は、平易で読みやすいものだと思います。悪く言えば物足りなさもあるのですが、一旦、読み始めると、平易文体の背後から作者の情念が迸り、読者をぐいぐいと引き付けてしまうのです。上記山田氏引用にある「力技で読ませる技量」は、確かに存在します。文芸評論家としての、またツイッター上での土居氏は、温厚な御人柄と常識的な市民感覚がありますが、作家としての土居氏は、情熱的な少年性が顕わになっています。このギャップは面白い^^

「途中で語り手の視線が移動したり、謎解きのスリルを未解消のまま終わったり」という引用に関しては、確かに同作品は一人称視点で始まってはいるものの、章によっては三人称視点になり、挿話まで織り交ざりカオティックな様相を呈しています。登場する女性キャラクターも、作者の意図なのか、素性が変化しているようです。個人的には、このカオスを「メタフィクション要素」と捉えて、楽しみました^^ 村上春樹氏の近作『1Q84』では、意図的に謎解きを行わず、読者の想像力に委ねる旨を春樹氏自身が述べています。土居氏の『1989年』にも、同質の文学要素が用意されていると思います。

…こんなところ、ですかね^^ 最後に。『1989年』の原型である『パプロのいる店で』は1999年に自費出版されたそうですが、僕も2004年に『TEDDYBEAR COUSELOR』という小説を自費出版しています。土居氏と状況が重なるのですが、その後の土居氏の躍進を鑑みると、同年代の僕としては…ちよっぴり悔しいですね(≧ω≦) 御自身の御人柄や平易文体で魅せる情熱など、長所を理解されている姿勢を見習いたいと思います。

(小説【太鼓の少女】(佐藤貝 著)を読んで (続く))

小説 【太鼓の少女】（佐藤貝 著）を読んで

2012-12-01 テーマ：書評



(イメージ画像→[引用元](#))

僕がツイッターを始めた頃にフォローして、懇意にしている佐藤貝氏の新作小説を紹介し、書評いたします（現在、佐藤貝氏は森新児氏と改名しています。ここでは旧名で表記します）

少年文芸手帳 第957回 太鼓の少女（1） 夏の夜

<http://shoubun.blog51.fc2.com/blog-entry-1427.html>

まず、佐藤氏が運営しているブログ「少年文芸手帳」に書かれているプロフィールを引用します。



(イメージ画像→[引用元](#))

熊本在住男子。趣味は古本屋めぐり。ギターは近頃さぼり気味。最近の枕頭書はドストエフスキーの『悪霊』。この夏のヘビー・ローテーションはビートルズ三枚目のアルバム『A Hard Day's Night』。このアルバムが「ジョン・レノンの最高傑作」と確信。同盤ラスト・ナンバー『I'll Be Back』に涙する日々だが、自分に活を入れるときはデビュー・アルバム『Please Please Me』のラスト・ナンバー『Twist And Shout』を聞いています。

(佐藤貝 少年文芸手帳 プロフィール から引用)

佐藤氏はブログ「少年文芸手帳」に毎日、小説やエッセイを掲載していました。そのバイタリティに、僕は舌を巻いたものです(≧ω≦) 僕も一端ながら小説を書く身ですが、毎日、面白い物語を発想していく自信は…ありません^^; 佐藤氏は常に挑戦的で、その姿勢を僕は敬愛しています。佐藤氏は十数編もの長編小説と中編小説をブログに掲載していました。その中で個人的に気に入った一節を引用しますね。文体内容から、佐藤氏の個性を掴んで頂けると幸いです^^



(イメージ画像→[引用元](#))

少年文芸手帳 第597回

無縁物語 第二部 大日本帝国篇(47) 織田富士男大日本帝国首相

<http://shoubun.blog51.fc2.com/blog-entry-781.html> (現在は休載)

二階の回廊にいる僕の目に最初に飛び込んできたのは、夏の浜辺のスイカのようにグシャリ！ と頭を潰された、首相警護のSPたちの姿だった。更に、

「……」

床に散乱したパイプ椅子を踏みつけ、その死体群を悠然と見ろしているのは、一匹の巨大なヤマト

だった。

二足歩行する肉食恐竜そっくりのボディをヤマトはしていた。

すなわち逞しい、赤っぽい胴体。

長い首に長い尻尾。短い手に鋭い爪。

背丈は僕がいる二階の回廊を超えるほどだから、軽く七八メートルはあるだろう。

それだけなら完全にジュラ紀の恐竜だが、顔が違う。グルリ！

ゆっくりと太い首を振るヤマトを見上げ、ステージの倉部君が、こう呟く声が聞こえた。

「オヤジ……」と。

そう。怪物ヤマトは、何と織田富士男首相その人の顔をしていた！

(中略)

次の瞬間、首相の口が耳まで裂けた。

「ガッ！」

SPを啜え首相はそれを高々と掲げた。

「グワ！」

バタバタ！ ひっくり返ったカブトムシみたいに、SPは手足をバタバタさせてもがいた。

「ガッ！ ガガ……ギャッ！」

バシャッ！ と噴水のように大量の血を撒き散らし、SPの体はバラバラにちぎれて床に落ちた。

(佐藤貝 無縁物語 第二部 大日本帝国篇(47) 織田富士男大日本帝国首相 から引用)

…アメブロに掲載可能か？微妙な引用ですが^^；、佐藤氏の小説は、ホラーやセクシュアルな描写を含めて、タブーを恐れないストレートな物言いを行うことが、第一の特徴だと思います。また上記文体からお判りのように、「擬音」を駆使した、小説よりも戯曲やシナリオに近い、リズム感ある文体も佐藤氏の特徴だと思っています。



(イメージ画像→[引用元](#))

次に引用する小説も印象的でした。

少年文芸手帳 第484回 影と一緒に (67) 〈きづき〉の教祖

<http://shoubun.blog51.fc2.com/blog-entry-555.html> (現在は休載)

「誰もが夏目漱石になれるわけではない」

薄く目を開いて僕を見つめ、先生は言った。

「ほとんどの作家は、いわゆるアマチュアの同人作家で終るだろう？ どんなに頑張っても、『彼』の作品は誰にも一頁も読まれない。どんなに頑張っても書いても、『彼』には一文の得にもならない」

「……」

「でも周りの人間に幾らやめろと言われても、『彼』は書き続けるだろう。我々の宗教修行も、それと同じなんだよ」

「……」

ホー・ホー・ホー。

そのとき初めて、僕は宗教の修行というものが、ストンと腑に落ちた。

なるほど、つまり、そういうことなんだな。すると、

「佐藤貝君」

「はい？」

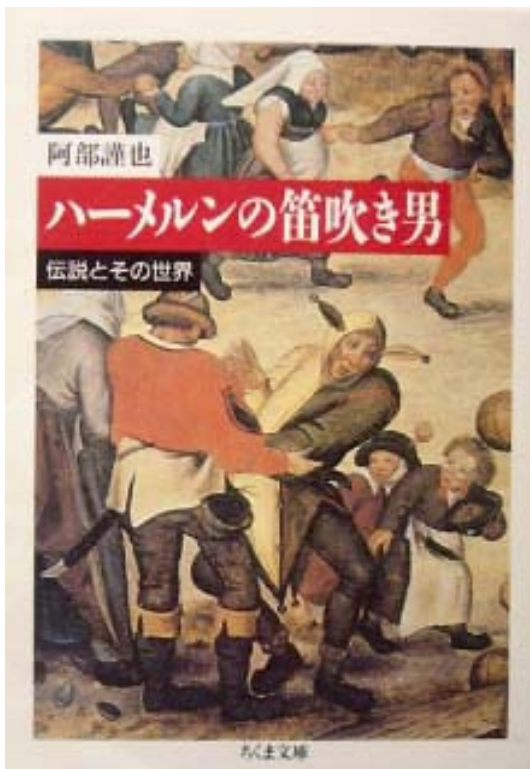
見ると半眼の顔に笑みを浮かべて、先生は僕にこう言った。

「君は必ず〈いい小説〉を書かなければ駄目だよ。いいね、佐藤貝君」

(佐藤貝 影と一緒に (67) 〈きづき〉の教祖 から引用)

御覧のように、上記小説には佐藤氏の自伝的要素が含まれていると思います。東京都文京区にある白山の大学を舞台に、茗荷谷という町の印刷屋で、文芸部の小冊子を作る件が登場します。実は僕は、東京都文京区が生まれ故郷なので、この『影と一緒に』は特に親近感を抱きながら拝読いたしました^^ 併せて上記引用にある「先生」とは…何者なのか? …興味ある方は引用先URLを遡って確認してみてください(現在、引用先URLは休載しています)。

「でも周りの人間に幾らやめろといわれても、『彼』は書き続けるだろう」「君は必ず〈いい小説〉を書かなければ駄目だよ。いいね、佐藤貝君」…これらの台詞には凄味を感じます。昨今はゼロ年代ロスジェネを気取った若き作家が、文学フリマに出店するだけで満足している時代です。そんな若者には真似の出来ない決意が、上記文章から滲み出ています。「リア充」「非モテ」と意図的に区分けして、その枠からはみ出さず愚痴の思想を書き連ねるとは、違うのです。ザクとは違うのです!



(イメージ画像→[引用元](#))

それではこの辺で、佐藤氏の新作小説『太鼓の少女』を改めて、紹介書評してみましよう！ まずは第一話の一節を引用してみます。先に挙げた過去小説と比べて、文体が変化しているのが伺えます。

少年文芸手帳 第957回 太鼓の少女（1） 夏の夜

<http://shoubun.blog51.fc2.com/blog-entry-1427.html>

「子供たちは何処（どこ）へ行ったのか？」

という不吉な言葉が、壁に映る大きな蛾の影のように目に飛び込んできた。

東北の大震災からおよそ五ヵ月後、八月になったばかりの夜だった。僕は自分の部屋で文庫本を読んでいた。

日めくりカレンダーをめくると同時にその日何があったのか忘れてしまうような、そんな平凡な夏の一日が静かに終わろうとしていた。東北の人々の暮らしは震災以来ずっと困難をきわめているが、震源地を遥かに離れた九州の、そのほぼ真ん中に位置する熊本市に暮らす中学生の日常は、震災前後で変わったことはまったくなかった。

強いて変わったことを上げるとするなら夏休み前に僕が剣道部をやめ、十年間ほぼ毎日握っていた竹刀（しない）を握らなくなった、という個人的なことくらいである。竹刀の代わりに、別のあるものを握ってみたくなくなったのだ。

そのとき開いていた部屋の窓から、不意に夜風が吹き込んできた。レースのカーテンが畳に落とすモザイク模様の影が、波紋のように揺れている。机に向って文庫を読んでいた僕は風にあおられるように顔を上げ、横を向いた。

（佐藤貝 太鼓の少女（1） 夏の夜 から引用）

過去小説で見られた戯曲的なリズムミカル文体は影を潜め、新作小説は粘り強い文体で書き進められています。そこに新作に賭けた佐藤氏の気迫が感じられます。新作小説の主人公は、十四歳の少年。所謂、ひと夏の体験で少年が成長する物語、「ボーイ・ミーツ・ガール」物とカテゴライズされるかもしれませんが。今の時代で、十四歳の少年が主人公と言え、『新世紀エヴァンゲリオン』の碇シンジ

を思い出します。しかし佐藤氏のボーイ・ミーツ・ガール物は「逃げちゃいけない」なんて弱音は吐きません。



(イメージ画像→[引用元](#))

少年文芸手帳 第960回 太鼓の少女(4) 旅の始まり

<http://shoubun.blog51.fc2.com/blog-entry-1430.html>

「何かお手伝いしたいのですが」

演奏を終えた直後の彼らに、僕はいきなりそう声をかけた。

一座は今夜は山のふもとにある小さな神社で演奏していた。時間はすでに午前零時を回っている。

拝殿(はいでん)があるだけの殺風景な境内に、溶けたチョコレートのように濃密なブルースと甘い香水の香りが立ち込めていた。

今夜も十人ほど聴衆がいたが、若い彼らは昨日の聴衆と同じようにうつろな目をして演奏中もじっといた。演奏が終ると彼らは無言で帰っていった。

唐突な僕の申し出を聞いてアコーディオンを弾く大柄な少女と、ブルースハーブを吹く小柄な少女は戸惑った様子で顔を見合わせ、それから二人ともまばたきした。

ギターを弾く若い男性は巣に隠れる獣のように、素早く顔を伏せた。

そして赤い浴衣を着た太鼓の少女はこちらに背を向け、僕の顔を見ようとしめない。

するとウッドベースを弾く巨大な美女が、着物の袖を縛った紐を「シュルリ」と解いて、僕にいった。

「坊やは何ができるんだい？」

その野太い声を聞いて、僕は初めて少女たちがマダムと呼ぶこの美しい女性が、実は男性であることを知った。

(佐藤貝 太鼓の少女 (4) 旅の始まり から引用)

上記引用から伺えるのは、「ブルース」という音楽ジャンルと、寺山修司の実験映画やアングラ演劇に出演しそうな「奇異な登場人物」です。佐藤氏が描く十四歳の少年は、萌え系美少女よりも、濃いキャラクターと出会ってしまうのです。ここに今の時代の十四歳の物語→中二病的な物語は存在しません。寧ろ、ひょっとしたら佐藤氏は不服かもしれませんが、村上春樹氏の『海辺のカフカ』の主人公、十五歳の田中カフカ少年が近いかもしれません。「レディオ・ヘッド」「プリンス」「クリーム」「デューク・エリントン」を愛聴し、家出をしても、午前中はジムで汗を流し、午後は図書館に入り浸る、風変わりな村上氏の少年の匂いが、佐藤氏の少年にも存在しています。



(イメージ画像→[引用元](#))

『太鼓の少女』は長編小説です。その中で僕が気に入っている件は、「クロスロードの伝説」です。

少年文芸手帳 第967回 太鼓の少女 (11) クロスロードの伝説

<http://shoubun.blog51.fc2.com/blog-entry-1437.html>

僕がそう言うと、五郎さんはR Jことロバート・ジョンソンの伝説を語り始めた。

それは異様な伝説だった。

五郎さんの話によると、十七歳のころR Jのギターはとても下手だったそうだ。ジュークジョイン

ト（南部にある酒場のような場所でバンドの生演奏がつく）の客が怒り出し、演奏をやめろ！ とR Jは怒鳴られたりもしたという。

そんな十七歳のR Jを悲劇が襲う。

結婚したばかりの奥さんが難産で、子供とともに亡くなったのだ。奥さんはまだ十六歳だった。妻子を亡くしたR Jは人々の前からふっつりと姿を消す。

それから一年後、再び友人たちの前に現れたR Jは、もう以前の彼ではなかった。

「ギターの腕前が格段に上がっていたんだ」

ギター一本でフルバンドのような音を出した、と五郎さんはまるで自分が直接その演奏を聞いたみたい言い方をした。空白の一年間で、R Jはアイク・ジナーマンという、これも謎の多いブルースマンを師と仰ぎ、彼といっしょに夜の墓場で毎日ギターの練習をしていたらしい。

（中略）

R Jの腕が短期間で上がったのは、いわば師との特訓の成果なのだが、人々はそう思わなかった。

「奴は悪魔と契約を結んだに違いない」

と人々はヒソヒソ囁きかわした。R Jが活動していたアメリカ南部はブドゥー教が盛んで、そのブドゥーにこんな「儀式」がひそかに伝えられていたという。

悪魔との契約を望む者は、まず人のいない真夜中の十字路に一人で行く。彼の爪はあらかじめ短く切りそろえられている。無人の十字路に立ち、悪魔の登場を願いながら、彼は自分の一番得意な曲をギターで弾く。

やがて悪魔が十字路にやってくる。

悪魔がとなりにきてギターを弾き始めても、決してそちらを見てはいけない。演奏が終ると、悪魔が互いのギターを交換する。悪魔はすでに短く切りそろえた彼の爪を、さらに深く、血が出るほど短く切る。

その間も決して声を出してはいけない。

それから悪魔はまたギターを交換する。悪魔が立ち去っても決してそちらを見てはいけない。彼はギターを弾き続ける。

すると彼はいつの間にか、どんな難曲でも演奏できる技術を身につけている。

「……こういう儀式がブドゥーに伝えられていたんだ。ロバート・ジョンソンはこの儀式を実行して悪魔と契約したと人々は思った。もちろんそれは違う。彼の腕前が上がったのは墓地の特訓のおかげさ。でもその進歩があまりに凄かったんで人々は『奴は悪魔と契約をかわした』と噂したんだよ」

(佐藤貝 太鼓の少女 (11) クロスロードの伝説 から引用)

上記引用は、花村萬月氏の『ブルース』『重金属青年団』に登場しても似合う文章だと、個人的に捉えています。若しくは20年前の映画『エンゼルハート』（アラン・パーカー監督、ミッキー・ローク主演。ロバート・デ・ニーロがルシファー役を演ずる）を思い出します。「サタニズム」という濃厚なエキスを十四歳少年物に組み込んだ佐藤氏は、只者ではないですね！

さて、『太鼓の少女』には謎解き要素があるので、これ以上の物語紹介はネタバレに繋がるから控えます^^； 読み進めていけば、意外な展開が読者を誘ってくれます。興味ある方は是非、読み進めてみてください！

少年文芸手帳 第957回 太鼓の少女 (1) 夏の夜

<http://shoubun.blog51.fc2.com/blog-entry-1427.html>

…但し、僕はミステリーは苦手なので^^；、謎解きで得れるカタルシス、というものが…僕は得られませんでした…。佐藤さん、ごめんなさい！（≧ω≦） それでも、最終話の描写は好きです。何気ない描写なのに、背景に隠されている心情が静かに浮かび上がる。最終話は、とても詩的な文章だと思いました。アングラ劇団風ブルースバンドのミステリアスな素性が解き明かされていく物語。九州熊本の美しい自然描写を織り混ぜながら、クロスロード伝説や源為朝などの伝奇要素がスパイスとして活かされる。僕は佐藤氏の新作小説を、このように捉えました。『太鼓の少女』は、多種多様な要素が融合した力強い物語です。同じ物書きとして刺激を受けました。僕も佐藤氏に負けないように、僕ならではの物語を書きたいと思います！

(次回かえるちゃんブログは…クリスマスイブ?)

【KAGEROU】 ゴシップの影に隠れた純粹さ

2011-01-16 テーマ：書評

私もこの仕事を始めたときはどこか納得のいかないものを感じていました。わずかなオカネのために自分の命を断とうとする人もいれば、少しでも長く生きるために何億というオカネを惜しげもなく払う人もいる。同じ人間なのにどうしてこうも違うのだろうと。人間の命はみな平等じゃないのかと。生まれてすぐに死んでしまう子供もいれば、なにもしないで百歳まで生きる人もいる。たった数十円ぶんのワクチンや薬が買えなくて死ぬ人もいれば、若返りのための美容整形に途方もないオカネを注ぎ込む人もいる。

(齋藤智裕 KAGEROU 91頁から引用)



(イメージ画像→[引用元](#))

2010年11月、2000万円の高額賞金で話題になった“ポプラ社小説大賞”の、大賞受賞作が発表されました。“平成ライダー俳優”として著名な“水嶋ヒロ”氏が執筆した小説“KAGEROU”が受賞したのです。水嶋氏は同年秋に俳優業を辞めて、作家に転身すると公表していました。その矢先の受賞なので…“出来レースでは？”と影口を叩く輩が現れました。更に水嶋氏が2000万の賞金を“辞退”し、ポプラ社が受賞一ヶ月後の緊急出版化を決めた為に、悪評はより広まってしまったのです。その一連の流れは、どう考えても不自然だったのです。

12月になると、書籍化されたKAGEROUが書店に平積みされました。初版の受注数は“40万部以上”になります。あの“村上春樹”氏の“1Q84”の初版受注数を軽く越えてしまったのです。大ベストセラーの様相を示したKAGEROUでしたが、“Amazon.com”でのKAGEROU書評は否定的意見に占め尽くされました。星五つの肯定的意見も僅かに見受けられましたが、よく読めば、慇懃無礼に誉め殺しただけの否

定的意見です。個人的には、このAmazonの書評は、全く信用出来ないものだと思っています。そこには“2ちゃんねる”に近い悪意が漂っていたのです…。



(イメージ画像→[引用元](#))

ヤスオは人間に見つかりそうになったゴキブリのように気配を殺し、明かりがついたその部屋に目を凝らした。

(齋藤智裕 KAGEROU 7頁から引用)

二人を乗せたクルマは、温めたフライパンの上を滑るバターのように静かにゆっくりと走り出した。

(齋藤智裕 KAGEROU 56頁から引用)

村上春樹や司馬遼太郎などの作品評論や講演をされている“土居豊”氏は、週刊ポスト掲載の“KAGEROU 出来レース”記事を叩き台にして、自らの意見をブログに記しています。ここで週刊ポストの記事を要約すると、“水嶋ヒコ側からポプラ社へKAGEROUの原型小説の売り込みがあった。ポプラ社は内密に採用し、大賞受賞作とした。出版化の際には、ゴーストライターが文章の手直しを行った。”…となります。例えば村上春樹の1Q84には“ふかえり”という少女が書いた“空気さなぎ”という小説を、編集者の指示で、主人公の（作家志望でもある）“天吾”がゴーストライターとして手直しを施し、結果的に空気さなぎは文芸新人賞を受賞する、という件があるのですが、正にKAGEROUは“それを現実化”したのです。それでも土居氏は、前述のドロドロした側面を認めつつも、敢えて深く触れず、以下の主張を導きます。

小説というものは、「書ける人には書ける」「書けない人には書けない」という、非常に困難な文芸作品なのだ。(中略)だから、今回、人気タレントの水嶋ヒロが書いたデビュー小説についても、もし彼が「書ける人」ならば、様々な酷評や八百長疑惑があっても、その作品は読者の心をつかみ、生き残るだろう。もし「書けない人」なら、いくら話題性で売れても、一発屋で終わるだろう。ただそれだけのことだ。

(土居豊 週刊ポストが暴露した水嶋ヒロのデビュー小説内幕について から引用)

上記発言には、ドライな眼差しを感じつつも“ゴシップ的な悪評に惑わされずに長期的な視点で問題を分析しようではないか”という冷静な姿勢が伺えます。何事に於いても“冷静さ”は大事な心構えです。Amazonの扇情的なレビューも見習ってほしい、と思いました。



(イメージ画像→[引用元](#))

僕のこの胸のハンドルね、茜ちゃんも知っている通り、こうやって回し続けてないと死んじゃうんだ。つまり『生きたい』と思ってるから回してるわけ。そうやって考えると生きてるってすごいことなんだなって思うよ。普段はなにも意識してなくても心臓は勝手に動いてくれるんだからね。いまずぐに死んでしまいたいって思ってる人の身体の中でもやっぱり心臓は動いてるんだよ。なにかが心臓を動かしてるんだ。その『なにか』とはなんだろうって考えてみると不思議にならない？ 例えばさっきの茜ちゃんの仔犬の話じゃないけど、夕日を眺めているうちにわけもなく涙が出てきちゃったりするときの感覚と似てるっていうのかな……

(齋藤智裕 KAGEROU 206頁から引用)

“中森明夫”氏は、KAGEROUに対しての好意的意見をツイッターに投稿しました。中森氏は80年代のサブカルチャーをメディアで広めたな編集者(コラムニスト)です。代表作は“東京トンガリキッズ”、2010年に処女小説の“アナーキー・イン・ザ・JP”を上梓しました。個人的には、今まで目にしたKAGEROU書評があまりにもネガティブだったので、唯一のポジティブ・メッセージとして中森氏の感想を推薦します。下記にそのメッセージを引用します。個人的な補足は省くので“メッセージに秘められた純粹さ”を讀解してください^^

『KAGEROU』讀了。これはひどい！ と思った。文章はひどい、比喩は陳腐、人物描写は平板、セリフは凡庸、構成は粗い…よっぽど途中でやめようかと思った。これがポプラ社小説大賞？ ありえない！これが大ベストセラー？ ふざけんな！ 真面目に小説書いてるのバカらしくなった。

@a_i_jp 2010-12-17 23:54:10

それでもなんとか最後まで読み通した。結果…びっくりした。意外だ。なんと…感動した。正直に告白する。涙がこぼれた。近年、読んでもっとも心を動かされた小説の一つだ。このツイートをするかどうか随分、迷った。でも、いいや。…えいや！ っと、やってやれと思った。

@a_i_jp 2010-12-18 00:02:44

…てなストーリーはどうでもいい。私が注目したのは心臓を失った男が人工心臓を埋め込む設定。なんとそれが…ゼンマイ仕掛けなのだ！ ありえない！？ 大ブーイング。わずかに肯定的評価してる大森望氏でさえ呆れていた。つまり映画化してもゼンマイ仕掛けの心臓のシーンはありえないでしょうと。

@a_i_jp 2010-12-18 00:22:00

KAGEROUネタバレ注意！ …寝転がって読んでた私が、起き上がったのはこの場面だ。機械装置に繋がれてた男が機械を引きちぎり自らのゼンマイ仕掛けの心臓のネジを巻きながら、見そめた二十歳の美少女と逃避行、穴に潜りこんで愛を語る。この場面で不覚にも涙がこぼれた。

@a_i_jp 2010-12-18 00:25:15

断言しよう！『KAGEROU』は水嶋ヒ口の私小説だ。巨大な機械に繋がれてかろうじて生きていたのは芸能人としての彼自身だ。病を患う二十歳の美少女は絢香そのものだ。彼女との想いを遂げるために彼は巨大な機械(=芸能プロ)から自らの身体を引きちぎった。それは自らの命を賭した決断だった！

@a_i_jp 2010-12-18 00:32:50

そう気づいてから私はずっと泣きっぱなしだった。泣きながら『KAGEROU』を読んだ。病の少女・絢香と結ばれた瞬間から水嶋ヒ口は芸能プロから仕事を干された。芸能人としての彼はその生命をおびやかされた。比喻ではない。おそらく彼は自殺を考えたのではないか？ もしや絢香との心中も…。

@a_i_jp 2010-12-18 00:43:07

『KAGEROU』の評でもっとも批判的なのは書評家の豊崎由美さん @toyozakishatyou のもの。その豊崎さんが唯一、評価するのは主人公がゼンマイ仕掛けの心臓のネジを巻き忘れないこと。さすが豊崎社長！ たしかにあの場面は感動的だ。…なぜか？

@a_i_jp 2010-12-18 00:58:19

追い込まれた水嶋ヒ口が必死で自らのハートのネジを巻きながら書いたのだから！ 穴に逃げ込んだ男のゼンマイ仕掛けの心臓のネジを少女が巻いてあげる場面。そこで不覚にも私は涙を流した。まぎれもなく水嶋ヒ口と絢香が互いを励ましあい、なんとか生き延びようとするその姿が浮かんだ。

@a_i_jp 2010-12-18 01:02:21

『KAGEROU』はひどい小説だと非難されている。文学の名に値しないとも言われる。その受賞は出来レースとも疑われている。しかし…。これだけは言いたい。人気スターである青年がすべてを投げ打って愛する女性と生き延びるために本気で書いた小説なのだ！ その「本気」に撃たれた。

@a_i_jp 2010-12-18 01:09:45

(中森明夫 Together/中森明夫氏による『KAGEROU』の個人的な感想 から引用)



(イメージ画像→[引用元](#))

「いまごろになってようやく気づいたんだけど『死にたい』って、裏を返せば『生きたい』ってことなんだよね。死にたい気持ち強いからこそ生きたい気持ちも強くなる。最期に夢の中のオフク口がそれを教えてくれた気がするよ」

「よかったですね」

キョウヤがポツリとつぶやいた。意外な言葉に思わず振り向こうとしたヤスオに、キョウヤが続けた。

「そのことに気づけて……よかったですね」

(齋藤智裕 KAGEROU 151頁から引用)

最後に、僕個人のKAGEROU書評を記したいと思います。一言で言えば“感動した”となりますね^^ ある意味、中森氏と近い感動を僕も受け留めましたが、ただ僕の場合には“KAGEROU＝水嶋ヒ口の私小説”という解釈は感動の要因に含まれません。ただ純粹に“作者の内に秘めた死生観”というものに心を揺さぶられたのです。

“死生観”とは文字通りに“死ぬことや生きることに対する観念・考え方”となります。とある出版社の編集者は、死生観について、以下のように語っています。“小説に必要な要素は、ドラマ、スタイル、フィロソフィーという三つに分けられる。フィロソフィーとは小説に表れる書き手の人間観、人生観、死生観、世界観であり、それが感動と呼ばれるものに繋がる。” …つまり、物語の中に人の生きざまや死への恐怖が上手く描かれていれば読者は感動する、となる訳です。悪い例えだと“余命1ヶ月の花嫁”を物語として見れば、当てはまりますね^^ ; KAGEROUの死生観も同じ様に機能していると思います。

…但し、個人的には、今の時代の小説に死生観を仰々しく取り扱うのは…イケてないなあ、と思うのです^^； アメブ口で懇意にしている文学に造詣深い方は“今は純文学が貧血を起こしている時代”と仰ったのですが、正に、“夏目漱石のころ”“三島由紀夫の金閣寺”“大宰治の人間失格”が“旬”であった時代ならば、死生観は純文学を活性化するトリガーと成り得たでしょう。しかし今は、エンターテイメント小説やライトノベルがイケてる時代です。そこに、不必要と思われる程の“濃い死生観”を示す作家“水嶋ヒロ”が現れるのは“晴天の霹靂な事件”かもしれません^^； しかも、まだ20代の若さで、帰国子女のエリートでイケメン俳優でもある、そんなセレブな印象が伺えるのに、反比例な死生観を隠し持つとなると…益々、人間的に興味深いですね^^ 同じライダー俳優の“半田健人”氏と同じ匂いを、水嶋氏に感じはじめています^^

…それでも、水嶋氏の文章が下手なのは嘘偽りない事実です^^； 既に上記引用した“人間に見つかりそうになったゴキブリのように”“温めたフライパンの上を滑るバターのように”が、比喻センスの悪さを物語っています。寧ろ、折角、武器になる程の死生観を持っているのに、それを正確に伝える技術が未熟なのは、大きなデメリットに繋がります。中森氏も僕も、“我慢しながら読解して、本質を掴んだ”のです^^； それが、ゴシップや嫉妬に囚われている人が読んだら…邪念に振り回されて、KAGEROUの本質は絶対に見抜けないかもしれません。

つまり、土居氏の言及がこの点に着目されるのです。“書ける作家”とは“自身の筆力と表現力を駆使して、読者に主題を明確に伝える者”を指します。主題＝死生観が個性的でも、それを伝えるのにゴーストライターの力を借りるのは言語道断です。当然、水嶋氏は次回作を“水嶋ヒロ自身が一人で執筆して”、読者を説得させなければいけません。



(イメージ画像→[引用元](#))

中森氏の“KAGEROU=私小説”の仮説に沿うならば、KAGEROUとは、水嶋氏と奥様の絢香さんに架せられた試練を打開する為の第一歩、となるでしょう。順風満帆の人生を送ったかに見える水嶋氏が、実は強固な死生観を産む程の苦悩を抱えながら今の地位を築いたのであれば、KAGEROUの次に来るであろう新たな試練も、必ずや克服し、前へと進まなければなりません。

この俣、筆力研鑽して作家を続けるのか、KAGEROUの映像化を自らがプロデュースするか、KAGEROUの世界観を導入したコンセプトアルバムを音楽業界から発表するか、…恐らく、彼の場合なら作家=文学にこだわらず、柔軟な展開が出来るような気がします。もし、文学にこだわらなければ、今回のゴシップ騒動のもう一つの要因であるポプラ社から離れるのも有り、でしょう。KAGEROUとは、そんな予感を抱かせる“メディアミックスの原石”であって欲しい、と思っています。

(次回、かえるちゃんブログは二月第一週の週末予定。寒さが厳しくなってきたので、思いきって…
熱帯特集でもしましょうか? ^^)

コメント

1 ■そうだったのですか

ゴーストライターはいるなぁと思ってたのですがやはりいるのですね

して「余命一ヶ月の花嫁」これ個人的に。。

なんだよお〜というものがあ。。中途半端な感じを受けた。。だってだってなんだもん

あつ。。言っちゃったケロっ(・ω・)/

背景がすごくわかってなるほど~~~~と

うなずいてしまいました。。

さすがの視点ですね〜♪

次回熱帯特集。。楽しみです

maco(しばらくペタ閉めてます) 2011-01-16 12:57:55

2 ■たいへん面白く読みました。

アマゾンをはじめとする、本作に関する、多数のレビューには、例の文学賞に関わる一連のごたごたが、作品解釈をゆがめてしまっている様が伺われます。そのほとんどが否定的であり、作品論になっていないものもあります。

“中森明夫”氏の解釈する、KAGEROU私小説論はなかなか面白いですが、解釈の妥当性を裏付ける事ができない以上、空想の域に留まらざる得ません。作品の舞台裏を憶測する事により、本作を解釈するよりも、作品に表現された、作者の思想や世界観を指摘するM☆A☆S☆Hさんの解釈は、作品に対して公正であるといえます。引用された、KAGEROUの文章には、人生の短命であったり、長命であったりすることの不条理が綴られているなど、作家水嶋ヒ口の素直な考えが吐露されており、好感が持てました。もっとポップな作品だと勝手に想像しておりました。

「今の時代の小説に死生観を仰々しく取り扱うのは…イケてないなぁ」というご意見には、自分も賛成します。読者が作品を通して死生観と正面から向き合うことは、多くの読者には荷が重すぎますし、また、死に関する表現は、表現方法を誤ると陳腐になる危険を孕んでいるからです。余命を宣告された人間がけなげに生きる姿、その程度のもので感動する死生観が、マーケットを牛耳っているのですから、重めのもものは禁物かも知れません。水嶋ヒ口さんは、結構生真面目な人なのかもしれませんね。

syo-hyo 2011-01-16 16:11:57

3 ■Re: そうだったのです (ΦωΦ)

>maco(しばらくペタ閉めてます) さん

こんばんは ^^ やっと部屋に帰ってきました。ブログは出先でネットカフェからアップしました。

KAGEROUの本質は、出来レースやゴーストライターという要因に惑わされると見えないと思うんです。

それでも、あまりにも周りを騒がせてしまったので…ヒ口君はこの後、大変かもしれませんね ^^ ;

絢香さんとの結婚の時もトラブルがあったから、彼は案外、波風を立てずに静かに行動するのが下手なのかもしれませんね ^^ ;

余命一ヶ月の花嫁は… ^^ ;

僕も二年前から長期の体調不調と戦ってますが、それを客寄せパンダにしてしまうのは…本当に真剣だったのかな?と疑ってしまいますよね。

熱帯特集…口からでまかせです (ΦωΦ)

何にも考えてないや ^^ ;

まあ、なんとかなるでしょう (・ω・) /

M☆A☆S☆H 2011-01-16 19:08:13

4 ■Re: 楽しんで頂けて幸いです ^^

>syo-hyoさん

こんばんは ^^ 熱いコメントをありがとうございます ^^

僕はブログを五千文字に収めてるのですが(ライ麦の記事は一万文字で大盤振る舞いです ^^)、今回の記事は、当初はKAGEROUと、太田光さんの「マボロシの鳥」をセットで書評しようと考えてたのですが、実際にKAGEROUを読んだら…これだけで五千文字埋まるな、と判断しました ^^

あとは中森さんのツイートがあまりにもボリュームあったので ^^ ;、僕の書評の分量を抑えた次第です。

まあでも、中森さんのツイートは結構、評判が良くて ^^ KAGEROUに偏見を抱いてた方も中森さんのツイートを見たら、「KAGEROU、読んでみようかな」と姿勢を変えているので、流石は中森さんだな、と個人的に思っています。

80年代の文化をおもしろおかしく紹介した「元祖・新人類」ですからね ^^ 熱い伝え方だと思います。

併せて、僕自身の視点を評価して頂き、ありがとうございます ^^

最近は出版業でいうところの「編集」の意識でブログを書くようにしています。

主題を決めたとしてもただ垂れ流すのではなく、「僕ならではの視点」で主題を切り取り、紹介するように努めています。

上記の中森さんをはじめとして、土居豊さん、そしてsyo-hyoさんと、様々な視点を持つ方々の仲間入りが出来ればな、と思っています^^

水嶋ヒロ君、今回の件で意外な一面が見えたかもしれませんね。

この新たなる印象がゴシップに流れずに、良い方向へと向かっていってもらいたいですね^^

M☆A☆S☆H 2011-01-16 19:23:34

5 ■引用感謝

拙稿をブログに引用いただき、感謝します。一言付け加えますと、できれば「水嶋ヒロ」の名を最後まで明かさないうでほしかったと思います。昨今のタイガーマスクたちを見るにつけ、惜しかったなあ、と残念です。賞金辞退などせず、謎の仮面ライダーからの寄付に使う方が、ずっと話題を呼んだと思います。

takashi 2011-01-16 21:59:26

6 ■こんばんはー

M☆A☆S☆Hさんの誠実な書評が！！！！

いいですねー。素敵ですねー。

本編なんかよりオモロいのかも（笑）

ネットには、単に水嶋ヒロの人間性を否定したようなコメント多いですし、友達でも、知り合いでもないのに言い過ぎな文章多いですよ。（あきまへんな～）

まあ、僕は作品がどんな状況で生まれようが、ゴーストライターが書こうがオモロければ良いっすね。

水嶋ヒロに関するワイドショーネタも作品も全く興味なかったので「2000万いらならくれー」「同情しなくてもいいから金をくれー」

しか思わなかったっす（笑）

カゲロウには、ローテクなのかハイテクなのか、わからない心臓手巻き人間と二十歳の美人が出てくるのか（笑）

俺も二十歳の美人 5人くらいと合コンし・・・・ あっ話が・・・・

水嶋ヒロよりM☆A☆S☆Hさんの小説を期待してまーす。マメ本やったらカッコイイっすね（笑）

あっ、そういやあ「余命一ヶ月の花嫁」が嫌いだったので、ちょっと前に「余命362年の駄菓子屋のクソババア」っていうホラー話を考えましたわ。

僕は水嶋ヒロより糞下手な文章で三文ストーリーを沢山書きたいっすね～。

長くなってすみませんでした。

今回もしっかりした文章楽しめました～。

お互い、温めたフライパンの上を滑るバターのように色々と頑張りましょう！！！！

特殊磁気テープス 2011-01-16 22:23:11

7 ■Re: こちらこそ引用承諾、ありがとうございました。

>takashiさん（土居豊さん）

コメントありがとうございます。

いつもツイッターでは普通にやり取りしてるのに、ここだと何故か緊張しますね^^；

今回の記事は、土居さんの週刊ポストに対する言及がきっかけにもなっているので、そういう意味でも、引用の承諾に感謝しております。

水嶋ヒロをタイガーマスクにかける発想は興味深いですね^^つまり…あまりにも「俺が！俺が！」と前に出過ぎた感が、今回の受賞にはありましたね。

そこに慎ましさがあれば、KAGEROUの魅力もより多くの人に伝わったのかもしれませんが…。

M☆A☆S☆H 2011-01-17 00:13:25

8 ■Re: もう眠いですー（ρω*）

>特殊磁気テープスさん

いや^^特殊さんのコメントの方が僕よりオモロいよ^^

入場していきなりリアット一発くらわす圧倒的な個性が特殊さんにはあると思います^^

水嶋ヒロの小説もよく読めば…圧倒的な個性があるんだけどね～^^；

リングに上がる前にヤラかしてしまった感じです^^；…北尾光司が新日本プロレスでデビューした時の感じと重なるかな←古い^^；

話し変わるけど、僕は今年は小説を書くのを一時的に保留にします。

前に話した、剛竜馬をモデルにした小説も封印するので、もしよかったら、特殊さんに剛竜馬をあげます☆

これからもお互いに、温めたバターの上を滑るゴキブリのようにがんばっていきましょう！

…嫌な比喩の使い方だなあ^^；

M☆A☆S☆H 2011-01-17 00:47:48

吉本隆明×吉本ばなな

2012-03-22 テーマ：マサくまハッピーライフ★

マサユキ「皆さん、こんにちは。毎年3月22日恒例の、僕とくまちゃんのブログ、“かえるちゃんもうさぎちゃんも笑ってくれるの”のリニューアルでございます。今年のテーマは、“三月十一日の未来を静かに語る”です。しっとりしたスキンデザインと荘厳なYouTubeで、重戦車の如く語っていきたいと思います」

くまちゃん『最初は、“よしもとのおじいちゃん”の追悼だよね（・ω・）』

マサユキ「うん。今年の3月16日に、戦後最大の思想家で現代詩人である“吉本隆明”さんが逝去されました。恐らく、今の時代で吉本氏を知っているのは、数十年前の安保反対闘争で活躍した人達ではないでしょうか。僕のような安保時代に生まれた者は、かろうじて吉本氏の影響を受けている程度に過ぎない。代えて今は、“吉本隆明はよしもとばななの父親”の認識が強いかもしれません。…そこで、興味深い本をご紹介します！ 父・吉本隆明と娘・よしもとばななの対談本です！ まずは対談冒頭の、吉本氏の幼い頃の記憶から引用してみましよう」



(イメージ画像→[吉本隆明×吉本ばなな](#) より引用)

吉本隆明「記憶に残って、今でも覚えていて鮮やかで、というのは、そうね、五つか六つくらいかな、小学校に上がる頃かな。新佃島の家において、まだおじいちゃんがいて——おじいちゃんって俺のおじいちゃんだから、親父の親父だよ——おばあちゃんがいて、こっちの記憶ではおばあちゃんが奥で寝てる時のほうが多いくらいだから、八十歳前後じゃないかな。おじいちゃんは毫碌して時々おかしくなる訳です。おじいちゃんの影響は、細長い板にね——」

よしもとばなな「板？」

隆明「うん、木の板にね、船の図面を引いてるの」

ばなな「（笑）おもしろいぞお。何で？」

隆明「あのね、大工さんって船の大工さんも家の大工さんも皆そうなんだけど、立体図を描いて寸法を入れてあればいいのね。例えばこういう抽斗の箱みたいなものを作る時にはさ、その立体図を描いて、縦何寸何尺、横何寸何尺とか、それから長さは何寸何尺って書いて、それで後は大凡の立体図が描いてあれば、それで作れるのね。船の大工さんもそうでね、こういう大きくて細長い板にね、おじいちゃんは鉛筆を舐め舐めして、船の図面を描いていたんだ」

ばなな「へえ～」

隆明「うん。だから少し頭はぼけてきてたんだけど、昔のそういうのをきっと思い出して描いていたんじゃないかね」

（吉本隆明×吉本ばなな 15 頁から引用）



（イメージ画像→[吉本隆明×吉本ばなな](#) より引用）

くまちゃん『なんか、まさゆきのお父さんと似てるよね（・ω・）』

マサユキ「^^ 僕の父は昭和元年生まれだから、吉本氏と同年代ですね。父も大工関係の仕事をしていて、休日は趣味で日曜大工を行っていました。上記で吉本氏が語るような行為を、父もよくしてましたね。そして、父の小学生時代の思い出話もよく聞きました。対談本でも、吉本氏も自らの小学生時代を語っています。“マルクス主義は大嫌いだ” 発言も織り込まれていて、小学生の頃に既に、後年の安保闘争を切り込む情熱が育まれていたのが判り、にやりとしてしまいます^^」

くまちゃん『ばななさんの突っこみが、いい味、だしてるよね（^ω^）』

マサユキ「…そういう見方もあります^^ ;」

隆明「（前略）例えば体操の時間にドッジボールみたいのをやるでしょう？ 自分の前にいた奴が向こうからきた球を受けてね、やっと受けたんでひっくり返っちゃって後ろにいた俺に乗りかかってきて、二人とも転んじゃった。そうすると、何て言うんだろう、『よせよ』って言うくらいに押せばいいのに、わざわざね、『何だこら！』とか言って足で蹴飛ばしてね（笑） そういうことが無意識な時にある訳ですよ。そうすると我ながら『いけね！』って思う訳ですよ。素直にこういう風にやればよかったのに、俺は『え〜い！』っていう風にやったの。これは良くないと思いながら」

ばなな「それを気にしていること自体が何というか、何というか（笑） その性格がしかも、この歳になるまでずっと変わらない訳ですね。そのことを気にし続けているのも含めて」

隆明「そうそうそう、うん。そこが暗いところなの（笑） そういうのずっと気にする訳。先生がそれをたまたま見ててさ、『今、わざと蹴飛ばした。それはとても良くないことだ』と言う訳。こっちもやった途端にそう思ってんだからさ、その通りだと思う訳なんだけど。それで済むかと思ったら、その先生はさ、もう、一学期中、それを言ってる訳だ。何かがあると、それがすぐ出てくるんだよね。それで、僕は小学校の時だけは秀才でしたからね。勉強だけは良く出来たほうだから、何かって言うと『お前がここに出て何かやれ』みたいなことを言われる代表格だったんですけどね。そういう目立ったところもあったんでしょうけど、そういうことを一学期中、ことあるごとに言われて、『これは参ったなあ』っていう、これは苛め（いじめ）だっていう風に思うんだけど、なんかその苛めがこっちの一番弱点だっていうところを、自分で自分を嫌な奴だっていう風に思っているところを突いてくる訳ですよ」

ばなな「それがこんなに心の傷になって、こんなに大人になるまで残っているという」

隆明「そうそう、うん、そうなの。残ってる。それで俺が今、一番嫌な奴だと思っなのはさ、『俺はエリートで秀才だ』みたいに思ってて、それでもって『マルクス主義だ』みたいなことを言う奴はもう、俺、大嫌いなんだよね。我慢ならない。『こういう奴はもう生かしておけねえ』みたいに、我慢ならない訳です（笑）（中略）だけど僕はね、自分が嫌な奴だっていうところは（それとは）全然違うところなんです。それはもう克服しようと思って、随分、一生懸命、思い悩んだところなんです。ね。」

だから見かけ上は今は無いんです。だけど、無意識までいったらやっぱりあるってところは否定出来ない。つまり無意識でも、意識出来る無意識というものだったら、それは治せるし治る訳ですね。だけど意識出来ない深みの無意識っていうのはね、やっぱり治らないんです。それは宿命的なもので、どうしようもないものなんだけど、ここに引っ掛かってくるところがある内は、やっぱり治ってないと思いますね」

(吉本隆明×吉本ばなな 30 頁から引用)



(イメージ画像→[吉本隆明×吉本ばなな](#) より引用)

マサユキ「次に、夭折された姉を語る吉本氏を引用します。改めてこの対談本を読み返して思ったのは、今の時代、特に震災を通過した今の時代ならば、吉本氏の姉に対する思慕、ある意味、情念とでも言うべき強い想いに…ネガティブさを感じないのです。前述の引用では、ばななさんのウイットの効く返事が、吉本氏の熱さを絶妙にクールダウンさせていたのですが、ここに至ると…熱さと情緒は紙一重、だと思ふのです」

くまちゃん『まさゆきも、短歌や俳句をやってるからね（・ω・）』

マサユキ「うん。正直に言えば、短歌も俳句も、今の時代に於いても限られた人達の玩具のような気がするし、その良さが判らない一般大衆と歌人俳人との溝は簡単に埋まらない気がします。但し、下記に引用する吉本氏の思慕が何となく掴めるのならば、短歌や俳句の良さも伝わるかもしれない…と思っています」

——吉本さんが二十四歳の時にお姉さんが亡くなっている訳ですけども、やっぱりその時も、そういうことが？

隆明「いや、姉はね、業は深くなかったんですよね。これを僕らが名前を知っている人を例にするとね、柳田国男っていう人がいるんですよ。この人は『妹』なんですよ。つまり、『いも』の力、なんですよ。つまり、自分を労わって傅いてくれるというか、それを昔流で言えば愛人とか恋人とか妻とか、ということなんでしょけど、そういうものは『いも』という言葉で総括しちゃうでしょう。そうすると、その力は偉大である、という風に、そういう考え方のほうに持っていっちゃう訳ですよ。そうするとね、高村光太郎という詩人にして彫刻家がいるんだけど、この人はねえ、『姉』なんですよ。姉の力っていうのは凄いということを書きもするし、実際に自分の姉はそうだったという風に言うんですね。物凄く飾って言うと美化してるんですけどね。僕もそうです、美化しますが、もう業なんて全然なくて物凄くいい人でね。（中略）色んな女の子がする遊びみたいなものを教えてもらったりして、例えば、おはじきとかお手玉とかを子供の時に教わったのを覚えているんですけどね。それでまあ、病気にしちゃったから——肺結核で、まだ抗生物質がなくて専ら空気療法とか栄養療法しかない時で、今で言えば、京王線の聖蹟桜ヶ丘というところに療養所があって、そこに長年入院してたんです。短歌の同人誌に入って短歌を作っていて、時々家に帰ってきても泣かない姉さん、という風な印象しかないんです。そうすると僕の中には、女の人の典型っていうんですか、そういう『姉』という感じなんですよ」

——じゃあ当然、亡くなられた時の喪失感みたいなものは、凄く大きかった訳ですよ？

隆明「大きかったですねえ。それで僕はね、姉の短歌を読むでしょう、そうするとこれは誰か男がいるっていうか（笑） そういう人がいるんだっていうのが判るじゃないですか。それでもって、死んでからちょっと色々と——病院の中にガリ版の雑誌とか短歌の同人誌みたいなものがありまして、そういうのを色々と探して、それで最後に行き当たったのは（中略）『やえがき』というガリ版で刷って綴じたような歌の雑誌があって、その主唱者の男の人がいてね、やっぱり歌を詠む人で、それでそのところを最後に訪ね当てて、そこへ行ったことがありました。それでその人と話したら、その人もやっぱり同病なんですよ。入院してないんですけど肺結核でね、奥さんがいるんですよ。それでその人と話をして、『姉の短歌の中のこれはあなたのことか？』って訊いて」

ばなな「しつこい（笑） 暗〜い」

隆明「（笑） そうそう。こっちはまだ学生でね、向こうは大の大人でっていう感じだったけど、それで、『そうだ』という話になってきて、色々な自分のことを言ってましたけどね。奥さんが居て子供が一人居て、そういう一種の恋愛感情に似たものを持って付き合っていたみたいなの、そういうことの緊さみたいなことを言ったりしてましたね。自分も病気であまりよくないんだ、ということも言っていました。それで、何となく安心っていうか、段々ほっとしたっていうか、もう済んだ、という風に思ったのは、その人が最後に『妻子がいると死ぬに死ねないじゃないですか』って僕に言ったんですよ。何となくその言葉で安心したっていうか、済んだという感じがして、それ以後は会ったことはないんです。うん。一応、追及したんですよ。探究したっていうか（笑） 暇だからでもありますけれど、探究して、そこまで突き止めたんですよけどね」

（吉本隆明×吉本ばなな 45 頁から引用）



（イメージ画像→[吉本隆明×吉本ばなな](#) より引用）

くまちゃん『よしもとさんの、ばななさん評価も、おもしろいよね（^ω^）』

マサユキ「この対談本の初版は 1997 年で、“ロッキングオン” という音楽系の出版社から発行されました。当時は“吉本隆明”氏よりも、作家デビュー後からうなぎ登りで人気が高まってきた“よしもとばなな”さんのほうが、時代にフィットしていたかと思います。そのような状況で吉本氏の、鋭

い眼力と父の優しさを兼ね備えた“ばなな評論”は、90年代のクールな匂いを良い意味でかき混ぜています。今の時代の視点で読み返しても、この評論は純度の高い“ネタ”となり得るでしょう」

隆明「（前略）——例えば君の『キッチン』の中でさ、母親が死んで父親が女になって子供を育てて、というのがあろう？ そうすると、あのモデルは俺なんじゃないかと思う」

ばなな「ええ～！？（笑） 斬新なアイディアだなあ」

（後略）

隆明「要するに書いた人の無意識なんだよね。無意識が、『あっ、これだ』って思わせる要因になる」

（後略）

ばなな「でも、お父さんはオカマ？」

隆明「（笑）そういう意味合いじゃなくて、ある時期、炊事当番をこっちがずっとやっていて、というのが——」

ばなな「ああ、母親不在の雰囲気とか、そういうのはすご〜く出てるかもね」

隆明「そうそう、そういうのはやっぱり無意識で出てるんじゃないかなって感じなのね」

ばなな「ああ、それは絶対あるね。そこまで言ってくれば、『あのモデルは俺』って言われて動揺しちゃったけど、そこまで言われれば、ムードの問題で言われれば実によく判る。胸がドキドキしちゃった。（後略）」

隆明「はははは」

（吉本隆明×吉本ばなな 191 頁から引用）



（イメージ画像→[吉本隆明×吉本ばなな](#) より引用）

マサユキ「最後に。1996年に吉本氏は、海水浴場で遊泳中に溺れて、意識不明の重体に陥ります。結果的に一命はとりとめたのですが、この事故が対談本の編集集中に発生した為に、巻末には父の事故顛末を語る娘の手記で締められました。…時が経ち、十数年後の3月16日に吉本氏が逝去された時に、僕は、この手記を思い出しました。今回の逝去で多くの人達が、吉本氏に影響を受けた人も、毛嫌っていた人も、口を揃えて“喪失感”や“欠落感”を訴えていました。勿論、僕も、80年代で吉本氏を後追いで、コム・デ・ギャルソンや遠藤ミチロウというタームから吉本氏に食いついた口なのですが、正直に言えば朝のラジオのニュースで悲報を聞いた瞬間、椅子から転げ落ちる程の衝撃を受けました。高齢で死期が近い予感は抱いてましたが、最近の糸井重里さんとの共同作業を拝見して、“まだまだ頑張っ欲しい！”という想いがあったのも事実です。…改めて、溺水事故に於けるばななさんの手記を読み返すと、多くの人達が吉本氏に対して“ゴジラとかウルトラマン”のような存在で見ていたことが判明して、僕自身にもそれが当てはまるのを自覚しています…。逝去後にツイッターで呟かれた、ばななさんの労いの言葉が、この手記にも重なります。“知の巨人”ではない“人間・吉本隆明”氏の逝去に、心からお悔やみ申し上げます」

くまちゃん『よしもとのおじいちゃん、安らかにお眠りください（UwU）』

みんなは父を、もうおじいさんになりつつある泳ぎのうまい男の人、としては見ていないのです。みんなにとって多分（私と姉にはほんとうに父だから仕方ないのですが）、父は「父親、父性」そのものなのです。たいていの人にとって幼い頃の父親というものは、決してこの世からいなくならない、あるいは否定したり越えなくてはいけない強い何かなのでしょう。何か確かなものを持った存在なのでしょう。子供が父親にこういう誉めちぎるようなことを言うのもいやらしいですが、そうなのだと思います。今回も、どういう仕事をしているかは関係なく、単に普通に肉体を持った七十一歳の人が無茶に泳いで溺れたというこの事件に対して、まるでゴジラとかウルトラマンとかそういう存在が溺れたかのような、必要以上の悪意を持って接する人がいましたが、その人達にとって、父はそういう架空の強い存在に近い何かなのだなあ、と思いました。評論の世界はバトルなのです。そう扱われることは父の望みなのかもしれないし、それは父が仕事でしてきたことなので、いいとも悪いとも思いませんが、身内としてはそれよりも嘆き、無事を祈り、心配して下さった人々の静かな親

切のほうに身に沁みたのは確かです。（中略）

父がはじめて筆談ができるようになった時、私は父が紙と鉛筆を求めているのが判らず、何度も聞き返しました。しかしそこに母がやってきて、ひとめで「書きたいの？」と理解したのを見て、「おお、夫婦！」と感動してしまいました。その上、父が「どうなった？」と書くと、母は父に覆い被さって、耳元で「お父ちゃんは溺れたの、それで、救急病院にいるの。石森さんがみんなやってくれたから、安心して治して。身体も頭も大丈夫だから。酸素の管は、早く肺から水を出すために入れてあるだけだから。あとは血糖値と溺れたこととの関係を調べるだけ」と知りたいだろう正しい情報を簡潔にすばやく伝え、それだけではなく、「わかった？ お父ちゃんは溺れたの！ 河童の河流れ！」と大声で言っていました。わざわざ、集中治療室で、意識が戻って最初に接したというのに、他に言うことがあるだろう。しかし、父は酸素を吸入しながら管につながっていて、その耳元で叫ぶ母は白衣を着てマスクをしていて、今だから言えますが、とてもかわいらしい光景でした。どんな夫婦にも意義がある、と、これほど痛切に思ったことがあったでしょうか。（後略）

吉本ばなな

（吉本隆明×吉本ばなな 340 頁から引用）

（次回かえるちゃんブログは4月にお贈りします☆）

桜

2012-04-01 テーマ：書評



(イメージ画像→[引用元](#))

お前、この爛漫と咲き乱れている桜の樹の下へ、一つ一つ屍体が埋まっていると想像してみるがいい。何が俺をそんなに不安にしていたかがお前には納得がいくだろう。馬のような屍体、犬猫のような屍体、そして人間のような屍体。屍体は皆、腐爛して蛆が湧き、たまらなく臭い。それでいて水晶のような液をたらたらと垂らしている。桜の根は貪婪な蛸のようにそれを抱きかかえ、いそぎんちゃくの食糸のような毛根を集めて、その液体を吸っている。何があんな花卉を作り、何があんな蕊を作っているのか、俺は毛根の吸い上げる水晶のような液が、静かな行列を作って、維管束の中を夢のように上がってゆくのが見えるようだ。

(梶井基次郎 桜の樹の下には から引用)

くまちゃん『(T w T)』

マサユキ「…あ、ゴメンね、くまちゃん^^； 今回のブログは桜の話をしよと思ったんだけど、最初はちょっと怖い引用だったね^^； 僕は東京の国立市に住んでいますが、去年の国立市に咲いた桜は物凄く綺麗でした。国立市は桜の名所で、毎年見事な桜が咲くのですが、去年は東日本大震災の直後で花見自粛が謳われていました。多くの人達が亡くなられた只中で、桜を見ながら酒を呑み騒ぐという行為が不謹慎だったのです。だからこそ去年の桜は、ただ静かに見るだけの桜でしたが、今まで見た中で最も美しいと思いました。例えば上記引用の“梶井基次郎の桜の樹の下には”では、本来の桜の美しさとは相反する死の描写が同居しています。ある意味、“桜=死”というイメージは因果関係が薄いのですが、実はそれに近い感覚が去年の国立市の桜にあったかもしれません。それは、

“桜＝鎮魂”です。東北で亡くなられた人達の魂を弔う想いが、桜の美しさを際立たせていたかもしれせん」

くまちゃん『でも、きれいだったけど、さびしかったね（´・ω・`）』

マサユキ「例えばね、震災以前の視点だったら、桜を主題にした小説で下記引用のような解釈があるのです。そこに、“桜＝美であるけれど悲哀もある”の秘密が隠されているかもしれません。…ちょっと、解読してみましようか^^」



(イメージ画像→[引用元](#))

一年か二年かのそんな乱読の間に、私は三つの桜に出会った。いずれも日本近代小説中の屈指の傑作短編である。そして、揃いも揃ってエロチシズムを幻想の中に描いていた。最初に読んだのが石川淳の『山桜』、次が坂口安吾の『桜の森の満開の下』、最後が本書に収録されている梶井基次郎の『桜の樹の下には』であった。私はこの三つを『日本近代三桜（さんおう）小説』と勝手に名付けた。この勝手な命名は私の名声欲を満足させるものであり、誰彼なくこれを吹聴して得意がった。しかし、私の心の底には何某かの不安が横たわっていた。梶井の『桜』の読後感を反芻してみると、どこか未整理であり、もどかしさが残るのである。『三桜小説』と名付けて得意がっていたぐらいだから、面白くなかった訳ではない。所謂、感銘だの感動だのとは違うが、鮮烈な衝撃を受けた。だが、それが何であるか、整理して語れないもどかしさが鈍痛のように残っていた。

(呉智英 集英社文庫“梶井基次郎 檸檬”鑑賞 から引用)

マサユキ「“呉智英”氏は知る人ぞ知る文芸評論家です。僕は敢えて上記解釈を“震災以前の視点”として捉えています。つまり震災以降は、文化の捉え方や社会の在り方等の個々の価値観が、震災以前から大きく変化していると僕は考えているからです。以前から僕のブログで引用している“竹熊健

太郎”氏の“3.11以降はオタク・カルチャーが変わる”発言も、価値観が変わった兆候を示しています。但し、冷静に観察してみれば、震災から一年過ぎた今でも、俗に言うオタク・カルチャーは消えることなく存続しています。変わる宣言をした竹熊氏自身が、今は何をされているかは僕は把握していません。結果的にそこには、震災衝撃が引き起こした不安感だけが未だに続いている、という事実が残ります。確かに、震災以前と同じ気持ちで、素直に娯楽を楽しめなくなった人達が現れているのを、僕は直感しています。僕自身も素直に楽しめなくなった者の一人です。ここで言う“不安感”は、上記引用にある、“梶井基次郎の桜の樹の下には”で感じる不安感と似ています。シンプルに捉えると、“桜の樹の下に屍体が埋まっている、と説明されただけで、何故、人は動揺してしまうのか？”が解決すべき課題になるのです」



(イメージ画像→[引用元](#))

この断層を越える遙か前、人は世界を子供の眼で見る。幼稚園の庭や教室にある様々な教育用具は、どれも単純な色と形で作られている。子供の世界では、赤は赤、白は白、丸は丸、四角は四角、綺麗なものは綺麗なものである。美しいものの背後に、美しさを保証するおぞましさであろうとは、子供の知るところではない。しかし、人は青年になる時、美しさとおぞましさは表裏一体であることを知る。美しければ美しいだけ、その背後にあるものはよりおぞましく、おぞましければおぞましいだけ、美しさはより美しく輝く。世界はそのようにある。今、眼の前にした断層は、青年にそのように教えるのだ。この断層を越える時、感受性の鋭敏な者は自己と世界との葛藤を作品にし、あるいはそれを描いた作品に共感を覚える。梶井基次郎も勿論、その秀でた一人である。桜の花の背後にある死の匂いを感知し、薄羽蜻蛉の生と生殖の歓喜の舞いが、積み重なる屍体の静寂と紙一重であることを知る。その時の戦慄と恍惚を、こんなにも適切に表現した作品は少ない。梶井は今、断層を越えつつある。越えようとしている。その最中なのだ。だからこそ、末尾の二行の決意が沸き起こっているのだ。

「今こそ俺は、あの桜の樹の下で酒宴を開いている村人達と同じ権利で、花見の酒が呑めそうな気がする」

村人達、それは既に断層を越え、それも大した葛藤もなく易々と断層を越え、彼方に住む人達である。彼等は、桜の花の美しさも、その背後にあるおぞましさも充分に知り尽くしている。否、あるいは村人達は、感受性鋭敏な梶井と違って断層など意識さえせず、また、美しさとおぞましさの表裏一体性に慄くことさえないのかもしれない。そういう村人達には、あの野卑で猥雑な花見酒を呑む権利があるのだ。しかし、梶井にはその権利がなかった。断層の手前で慄いていたからである。そして、今こそ村人達と同じ権利で花見の酒が呑めるまでに決意は固まりつつあるのだ。

(呉智英 集英社文庫“梶井基次郎 檸檬”鑑賞 から引用)

マサユキ「最近、個人的によく思うのは、ちょっと暴言かもしれませんが、“人間は、なんてちっぽけな存在なんだろう”ということです。まずはプライベートな例え話をいたします。今から 30 年前に僕の祖父が亡くなり、20 年前には祖母が亡くなりました。祖母の葬式を終えた後に僕は、“葬式の方法はもっと簡略化が出来るかもしれない。無駄な部分が多いと思う”と言ったのですが、母は激怒しました。“大切な肉親をこの世から失ったばかりで、悲しみに打ちひしがれている。故人への想いを慈しむ時間、つまり、弔いに関わる時間がどうしても必要だ。どんなに無駄が多くても、この行為は必要なのに、お前は何も判っていない。おじいちゃんの葬式の時も無駄と言い、おばあちゃんの時も同じことを言う。ちっとも判っていない” このように母は僕を叱咤したのですが、葬式後で言い争っている僕達に向けて、弟は静かにお茶を淹れてくれたのです。式後を労い、家族の分までお茶を用意してくれたのです。弟の行為を見て、母も僕も落ち着きを取り戻しました。…震災後から一年経った今の状況も、似ているかもしれません。僕のように能書きを言う人もいれば、母のように怒る人もいます。大切なのは、弟のようにお茶を淹れる行為、なんでしょうね」

くまちゃん『うん(・ω・)』

マサユキ「話を戻すと、上記の呉氏引用には、若き梶井基次郎は桜に美しさとおぞましさ同居して

いることを“気づけなかった”が、とっくの昔に花見を楽しんでいる大人達は、美と醜が同居しようがしまいが、“そんなことはどうでもいい”というくらいに達観している、という考察が伺えます。別の言葉で言えば、“肝が据わっている”になるでしょう。梶井は呉氏曰く“感受性鋭敏”の為、肝が据わった“野卑な大人”にも衝撃を受けたかもしれません。この初めて衝撃を受けた感覚が、呉氏引用にある“鈍痛のようなもどかしさ”に通ずると思います。但し、初体験でどんなにビビったとしても、そんなのものを屁とも思わず“ガタガタ騒ぐんじゃねえ！”と、ドンと構える人間は必ず現れます。…恐らく、この繰り返しをずっと人間は行っているのだろう、と、最近をよく思うのです。日本の歴史で見れば、今回の東日本大震災だけではなく、太平洋戦争の終戦直後も、幕末や明治維新の頃も、この堂々巡りを繰り返していたんだな、と思っています。そこに進歩があり衰退があったとしても、ただ繰り返されていくことに、一抹の虚しさを覚える時があります…」

くまちゃん『三歩すすんで二歩さがる、みたいだね（・ω・）』

マサユキ「別の視点で見ると、僕と同じ苗字のコメディアン“太田光”さんも、梶井基次郎や坂口安吾の桜を主題にした小説に対して、以下の発言を行っています。やはりそこにも、“桜＝死”というイメージが繰り返されているのが伺えます」



(イメージ画像→[引用元](#))

家でパソコンを開くと、妻からメールが届いていた。その時、妻は体調を崩して病院にいたのだが、その日の昼間、花見で桜を見て更に体調を崩し精神的に不安定になったと書かれていた。桜にあてられた、という感じだろうか。それで、近所の花屋で元々、自分が好きな花である薔薇を買って病室に飾ったら、ようやく気持ちが落ち着いた、というものだった。(中略) 妻のそのメールを読んでいて、唐突に中沢新一さんとの対談の言葉に思い当たった。

「かつて、日本人が表現していた死」

それこそがあの、満開の桜なのではないだろうか。 坂口安吾の小説『桜の森の満開の下』は、満開の桜が人間を狂気に導き、殺人へ至るという物語だった。そこには確かに殺人による恍惚が描かれていた。 桜の下で、大衆に向かい、散る美学を語った首相。日本人が愛する桜という花は、戦の象徴でもあった。美しい桜の散り際。そこに重なるのは武士道という言葉。「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」（『葉隠』 山本常朝） その後ろには桜が咲いている。（中略）桜は狂気も、毒も、その美しさの中に含んでいて、その表現は隠している。しかし我々の潜在意識は、その狂気と毒を感じ取ってしまうのではないか。だからこそ妻は、桜を見てバランスを失ったのではないか。

それでは何故、妻は薔薇を部屋に飾って落ち着いたのだろうか。それを考えて私はハッとした。薔薇がその棘によって、自分の中の毒をきちんと表現しているということに思い当たったからだ。薔薇は正直に自分の毒を提示している。美しいだけではなく、人を傷付ける危険性があることを示している。だからこそ妻は薔薇を信頼し、桜によって失ったバランスを取り戻すことが出来たのではないだろうか。

（太田光・中沢新一 憲法九条を世界遺産に 89 頁から引用）

くまちゃん『バラならいいんだね（・ω・）』

マサユキ「…うーん^^； 不思議なのが、何故、桜で不安になって、薔薇で正気を取り戻したのか？、ですね。つまり、上記で太田氏が挙げた理由に、個人的には説得力を感じないのです。読み物として捉えれば面白いのですが^^ シンプルに捉えてみると、“坂口安吾の桜の森の満開の下”や“葉隠”の引用はあくまでも一例であり、寧ろ、その一例を導き出したことに酔いしれる太田氏の姿が伺えて、興醒めしてしまいます。太田氏の奥様が薔薇で落ち着かれたのが、彼女自身が個人的に好きな花である理由ならば、それは納得が出来ます。もし、好きな花が桜であったなら、当然、桜で落ち着くことになるでしょう。桜は文学作品との関連性から狂気を孕み、薔薇は棘＝攻撃性を正直に現わしている

から信頼出来る、という仮説を、別の視点で証明して頂ければ、より興味深い言説になっていたかと思ひます。ここで重要なのは、下世話な捉え方になりますが、爆笑問題という知名度が高いコメディアンであり、文学の造詣深いキャラクターでもある“太田光”だからこそ、一般客に対しての発言に効果が見込まれる、ということでしょう。それは下記に続く、イギリスの映画監督で、以前は“モンティ・パイソン”という喜劇に関わっていた“テリー・ギリアム”氏との対話にも伺えます」



(イメージ画像→[引用元](#))

テリー・ギリアム監督が新作映画のプロモーションで来日して、対談した。『ローズ・イン・タイドランド』というその新作は、主人公の少女が自分の父親の屍体を剥製にして、父の屍体と過ごし続けるという内容だった。父親の剥製。「死と生の間の表現」私のフラッシュバックは続いていた。対談が始まると、ギリアムは昨日まで京都に居た、と言い、京都で桜を見ていた、この時期の京都の桜は素晴らしい、これは日本独特の文化である、他の国には無いものであると、興奮して話した。私はここ数日の、私の周りで起きている桜と死にまつわる偶然を説明する気にもなれず、ただ興奮するギリアムに、「桜は確かに美しいが、狂気を含んでいる。とても危険な花でもあるのだ」ということを何度も繰り返して言った。ギリアムが、私が何を言わんとしているのか、理解出来なかったのも無理もない。私自身も、自分の中でそれが何であるのか整理出来てなかったし、寧ろ混乱が増していた。「桜の下には屍体が埋まっているんだ」と私が言うと、ギリアムは一瞬、ギョツとして、すぐにおどけて、たまたまテーブルの上にあった花瓶から一輪だけ挿してあった薔薇を抜いて、叫んだ。

「おお！ ローズ、助けて！」

私は思う。やはり桜は、日本人の特別な花である。桜に象徴される恍惚は、恐らく他の国の人々には理解出来ないのではないだろうか。それは不安感であり、胸騒ぎであり、混乱であり、幸福感である。

(太田光・中沢新一 憲法九条を世界遺産に 94頁から引用)

くまちゃん『てりー監督は、お花見するおとな、と同じだね(・ω・)』

マサユキ「そうだね^^ 前述の呉氏引用に登場する“野卑な大人の花見客”が、桜の下に屍体が埋まっていることを信じないテリー・ギリアム監督に重なります。更に興味深いのが、この対話の中で太田氏が、“桜と死にまつわる偶然を説明する気にもなれず”と消極的になり、“ギリアムが理解出来なかったのも無理もない”と続けたことですね。最後に太田氏は“桜は日本人の特別な花”と締めるのですが、何故、ギリアム氏のような異文化の英国人に対して、“どうせ、話したところで伝わらない。このことは日本人だけの秘密にしよう”と振る舞ったのでしょうか？ 良い意味でも悪い意味でも、この対応は気になります。そして太田氏は、桜を、“不安”“胸騒ぎ”“混乱”というネガティブなキーワードで説明するのと併せて、“幸福感”というポジティブな意味も付け加えます。それはまるで、“桜=死”のイメージを独り占めすることに対する満足感、とも捉えられるのです。

“梶井基次郎”という作家は、“桜の樹の下には屍体が眠っている”というメッセージを作品に託して、後世に文学的影響を残しました。それは、一部の日本人の心を打ち、梶井没後百年近く経つ今に於いても、その影響力は失われていないと思います。僕自身も、梶井基次郎は宮沢賢治に次いで好きな作家です。梶井氏の作風は、大病を患っていた境涯故に、死のイメージが物語に常に漂っている点にあります。つまり、“桜の樹の下には”の作品以外にも、彼の代表作“檸檬”にも、“Kの昇天”や“冬の日”にも、死の表現は表れているのです。“桜=100パーセントの死のイメージ”を梶井は訴えていた訳ではない、と、冷静に捉えたいですね」

くまちゃん『まさゆきも、さくらのお話、書いたよね(^ω^)』

マサユキ「“くまちゃん”が出演するよね^^ 実は僕は、“桜の樹の下には”を主題にして、リミックス感覚で掌編小説を書いています。最後にそれを引用して、今回のブログをおいとま、しますね。本家の梶井作品に比べると拙いですが^^;、ただ、“桜=100パーセントの死”を僕が伝えなていないのはご理解して頂けるかと思います。去年の震災直後に咲いた桜は、多くの人達が亡くなられた

ばかりなので、ダイレクトな鎮魂の想いが桜に重なりました。今年は、従来通りに桜を楽しんでも良いかもしれません。但し、“桜=100 パーセントの酒宴”ではなくて^^;、それぞれの桜を楽しんでいきたいですね^^」



(イメージ画像→[引用元](#))

『ほら、あそこにも、さくら、が、さいているよ』

そんなくまちゃんの言葉に、僕はハッとした。気が付いたら、抱きかかえたバッグを強引にこじ開けて、くまちゃんが顔を出している。くまちゃんが見つめる先には、奥まった路地に静かに佇む一軒の家があった。その路地の周辺だけ、昭和の時代にタイムスリップしたみたいに、古びて黒ずんでしまっただえって木目が目立ってしまう板張りの家々が並び、江戸時代の武家屋敷みたいなデザインの瓦が殆どの家の屋根に乗っかっていた。そんなノスタルジックな香りが漂う家々の中でも一番にひっそり感を漂わせている家を、くまちゃんは見つめていた。その家には慎ましい庭があった。桜は、そこに咲いていた。先程の植物園にあったような、豪華な乳白色の塊を所狭しと枝にぶら下げたような、そんな化け物染みた桜ではなかった。小さな庭のサイズに併せた、肩身は狭い立場だけど優しい性格をしているから、その家に住む家族のことを気遣って、敢えてこじんまりと咲いている、そんな桜だった。果たして、その桜の根元にも、花見客はいるのだろうか？ やはり屍体のように纏わり付いて、桜から不可視の触手がまた、花見客の肉を残酷に突き刺しているのだろうか？

『だいじょうぶ、だよ。だって、さくらのきのした、には、にんげんさんの、したい、なんて、ねむってないからね。きのした、の、つちのなかには、みみずさん、が、いるの☆』

「……ええっ？」

(M☆A☆S☆H ぷちLemon.【純文学トリビュート～梶井基次郎】 櫻の樹の下には、屍体は眠っていない から引用)

(次回かえるちゃんブログは5月にお贈りします♪)

あとがき

改めまして、『タンジブル[tangible]なものを、穴に放れ。M☆A☆S☆H ブログ撰集1』を読んで頂き、ありがとうございます。

このタイトルは、拙記事内に書かれてある通りに、村上春樹氏の『考える人』という雑誌インタビューで発言された言葉から引用しています。『考える人』は三年前に出た雑誌で、今読み返してみても言葉は色あせず、知的刺激を受ける本です。

例えば春樹さんは、以下のような発言をされています。

「どんなにうまく書けていても、どれほどおもしろく書けていても、腹にそのベクトルがこたえないと、それは物語として機能していないことになります」

また、以下の発言も興味深いです。

「この人の書いた本は、次に出たらまた買って読んでみようと思う。もしそうだとしたら、その物語は（中略）生きていることになります」

正直に言えば、「腹にベクトルがこたえる」、「物語が生きている」の言葉の意味を、僕は掴んでいません……。おそらく、村上春樹を中心に研究している文芸評論家であれば（例えば、拙記事内でご紹介した土居豊氏のような方であれば）、春樹さんの言葉は鋭く分析されるかもしれません。

ただ、今の僕は、僕個人の直感で、「腹にこたえる」、「物語が生きている」という“言葉の響き”を“感じよう”としています。

それを、理路整然と、適切な言葉を選びながら説明できるようになれば、僭越ながら、僕は評論家の仲間入りができるかもしれません。僕は『桜』の拙記事で、爆笑問題の太田光氏に対して、「桜は純文学の関連性から狂気を予兆させる。薔薇は実際に棘を持っていることがダイレクトな攻撃性に繋がり、そのことが説得力を生む。これらの仮説を、別の視点で証明して欲しい」と問いかけたのですが、この問いは、実は僕自身が答えねばならないのです。

話を少しだけ変えて、ブログを書き始めた頃を思い返してみます。

最初は日記感覚でした。その日に起こったことを文章にして、不特定多数の誰かに報告する感覚がありました。誰に報告していたのかは定かではないのですが、その日に起こったことを忠実に振り返り、その時に感じた自分自身の感情を文章に表わそうと心がけました。

それが変わり始めたのが、今回、一番最初に掲載した拙ブログ記事、『フレイザーの金枝篇を希薄にして、1Q84は先に進む。』になります。最初は、1Q84 の書評を書くつもりでした。子供の頃の、夏休みの課題図書の読書感想文みたいに、シンプルに書こうと思っていました。

ただ、個人的には、フレイザーの金枝篇が1Q84の物語内に“挿入(include)された瞬間”は、その時に得た“触感のようなもの”は、見逃したくなかった。

前述の“感覚”を、理路整然と説明できれば、僕は、評論家の仲間入りができる。それでも今は、正直に言え

ば、クリティックなグループに“参加したい”という気持ちは、そんなには湧きあがらない……。

寧ろ、スピノザが、自著『エチカ』を、生前に発表しなかった姿勢のほうが、好感を抱きます。

それは、スピノザの説く汎神論が、当時はあまりにも冒瀆的で、周囲から反感を買った為に、怯えて身を潜めていたとも捉えられます。

ニーチェのツァラトゥストラは、山に籠ったり下山したりを繰り返していて、傍から見れば、みっともないと思われるかもしれません。……だったら、ブログに評論文を書かないで、電子書籍にもしないで、オフラインのハードディスク内に、自分だけが閲覧できる文章を保存すればいいのではないかな？ ……だったら、この電子書籍を作った目的は？ 今までブログに書いてきた文章に意味はあるのかな？ そんな堂々巡りを繰り返すことを永劫回帰に例えると、的外れという揶揄が、頭のいい人から放たれるような気がします……。

だからこそ、拙ブログ記事『吉本隆明×吉本ばなな』で引用した、ばばなさんの言葉が、印象深くなります。

「父は「父親、父性」そのものなのですね。(中略)決してこの世からいなくならない、あるいは否定したり越えなくてはいけない強い何かなのでしょう。何か確かなものを持った存在なのでしょう。」

「まるでゴジラとかウルトラマンとかそういう存在が溺れたかのような、必要以上の悪意を持って接する人がいましたが、その人達にとって、父はそういう架空の強い存在に近い何かなのだなあ、と思いました。評論の世界はバトルなのですね。」

これらの“感触”を踏まえると、今の僕にとっては、「評論の世界は、つまらない」になります。

また春樹さんの『考える人』に戻ると、「タンジブル (tangible) なマテリアル」や、「文化人類学でシンボルとかメタファーとかアナロジーとして捉えられるもの」に触れた時は、その感触は、実はとても気持ちがいい！そこで得た恍惚に留まらず、次のステップに進むと、タンジブル (tangible) なものを穴に放り込むと、最初の時とは違う触感が現れて、新たな恍惚感が持続するのです。

この恍惚感の連なりを、理路整然と説明する方法を模索していきたいと思います。今はそれを『連句的思考方法』という言葉で代替していますが、他の言葉でも説明ができるように研鑽したいと思います。この連なりの魅力にハマれば、例え評論の世界で揶揄されたとしても、スピノザのように隠遁の道を選んだとしても、ガリレオのように「それでも地球は動く」と呟くのです。

そのような気持ちが僕の中にあることを、最後に付け加えたいと思います。

また機会を見て、M☆A☆S☆Hの電子書籍を小出しにしていきたいと思いますね。

次は、『[Thich Quang Duc] 師は絶え間無く燃え滾る』に継ぐ小説になるかもしれません。

もしくは、ブログ撰集第二弾もいいでしょう。以前に会員向け（アメンバー向け）限定記事で、東アジア反日武装戦線とハードコアパンクの関連性を考察したものや、三島由紀夫とカート・コバーンの死の共通点を考察したものを、そっと掲載しました。それを電子書籍化するのも興味深いかもしれません。硬派な内容なので、簡単に閲覧できない工夫を凝らしたいですね。

これからも、色々と試していきたいと思います。宜しくお願いいたします。

2013年8月15日 M☆A☆S☆H

著者プロフィール



著者名「M☆A☆S☆H（まっしゅ）」 本名は大田正之。俳句を詠む時は「摩衆」を名乗る。

1966 年生まれ。東京デザイナー学院アニメーション科卒業。

アニメーション制作、ゲーム開発、3DCG 制作、WEB 制作などを務める。工場での肉体労働、人材派遣会社の支店長経験もあり。現在は医療系に従事。

アニメやゲームの実績は「となりのトトロ」「AKIRA」「スーパーロボット・シューティング」「ずんずん教の野望」がある。

小説は 2000 年代から書きはじめる。数作品を出版社に投稿（殆どが落選） そのうちの「TEDDYBEAR COUNSELOR おしゃべりするテディベアと、繊細な男の子の物語」を自費出版する。

2011 年の東日本大震災直後に、アメーバブログで「熊の童話」を連載する。

自分自身の作風を記すのは主観的になるが、ゲームの仕事をしていた時には「紫色の宇宙を描く男」「ドロドロとしたサイバーパンクの体臭が漂う」と言われる。

また、アニメの仕事の時には「韓国にも上手いアニメーターがいるね」と庵野秀明氏に言われる。

（当時の韓国のアニメーターは描画線が荒く、似たような線質でありながらもダイナミックな動きを描く自分自身の作風に対しての、皮肉を籠めた誉め言葉だと捉えている）

これからも人生の水面下に於いて、小説を執筆していきたいと思っている。

テディベアに象徴されるイノセント性と、中沢新一氏やジョゼフ・キャンベル氏から影響を受けた文化人類学視点（伝奇的視点）を活かした作風を追求したいと考えている。

奥付

書名 タンジブル[tangible]なものを、穴に放れ。M☆A☆S☆H ブログ撰集 1

著者 M☆A☆S☆H

電子書籍プラットフォーム ブクログのパブー／株式会社ブクログ

初版 2013/8/15

(C) M*A*S*H 2013